

尋常小学讀本卷11

特 65

348

新讀本研究資料

尋常科  
卷十一部

兼師範學校教諭  
訓導  
學校教諭  
訓導

鈴木村

木原田

正隆直

美作輝

共編



東京有文社藏版

081836-000-0

特65-348

尋常小学讀本 卷11

村田 直輝 / 等編

M43

DAC-6733



尋常小学讀本卷11 特 65

348

學校教諭  
訓導  
兼師範學校教諭  
訓導

村田直輝

市原隆作

鈴木正美

共編

新讀本研究資料

尋常科  
卷十一部

東京有文社藏版



特65  
348

自序

豊富なる知識は教育實際家の第一要件なり。これなくんば何等教授の方法も得て其運用を完くすべからず。

頃者讀本の成るや、編者職に教諭たるを以て、躬ら其扱方を師範學校生徒に授く。試に之を手録すれば、忽にして卷を成す。

自ら謂へらく、國民教育に於ける國語教授の事、得失二つながら響影甚だ大なりと、討議回を重ね。偶有文社主書を寄せて曰く、國定新讀本に關する著書、其類に乏しからずと雖も、未だ其實體に就きて詳密なる研究をなせるものなし、何ぞ之を公にし以て大方の示教を乞はざると。編者素より公刊の意なかりし

48. 5. 19

内宛

も、先從隗始に於ては敢て否むべきの要なし。而も願て意に安んせざるところあり。因て稿を携へて斯學の大家某博士を叩く。博士公私多事の間によりながら快よく高閣を賜はる、感謝何を以てかせん。聊事由ありて芳名を本書に公にする能はざるを至憾とす。

渺たるこの小冊正にこれ涓人の死馬のみ。若夫れこれが爲に、他日千里の馬の至るあらば豈に徒爾なりとせんや。豈に徒爾なりとせんや。

明治四十三年五月

編者識

尋常小學讀本卷十一目次

第一課	吉野山	一頁
第二課	蜜蝋	二頁
第三課	分業	六頁
第四課	兒島高德	二四頁
第五課	瀬戸内海	三三頁
第六課	我は海の子	四〇頁
第七課	車と船	四七頁
第八課	我が海軍	五三頁
第九課	臺灣より樺太へ	六二頁
第十課	熊王丸	七〇頁
第十一課	アラビヤ馬	七七頁

第十二課	笑	八
第十三課	少年鼓手	八六
第十四課	出征兵士	九四
第十五課	招待狀	一〇〇
第十六課	料理	一〇五
第十七課	時問	一一一
第十八課	畫工の苦心	一二六
第十九課	瀑布	一三六
第二十課	鵜飼	一三五
第二十一課	紡績	一三九
第二十二課	蟲の農工業	一四四
第二十三課	物の價	一四八
第二十四課	樺太より臺灣へ	一五四

第二十五課	諸葛孔明	一六〇
第二十六課	韓國の風俗	一六五
第二十七課	平和なる村	一七〇
第二十八課	同胞こゝに五千萬	一七五

目次終

山 野 吉

# 尋常小學讀本卷十一

教諭 村田直輝  
教諭 市原隆作  
教諭 鈴木正美

共編

## 第一課 吉野山

解釋

◎吉野山の歌の作者 八田知紀の作、この人鹿兒島藩士にして  
桃岡と稱する歌人なり、歌學を香川景樹に學ぶ。明治六年九月  
歿、年七五、◎歌の解 吉野山一部の櫻を見て、其奥の櫻を想像  
せるなり。『霞棚引き居る故に、この奥の方は判然せねど、今見  
たところは、満目皆櫻花なりけり』一端を見て其他の如何に美し

第一課

吉野山

かるべきかを類推せしむ。類推せしむるところに餘情溢るゝ計りあり。要するに、満山みな櫻花の美觀を直截にせず、颯ろに見せたるなり。このところ詩歌妙趣の點、次の歌と對照して考ふべし。

三芳野也、櫻一樹爾先見世天山口知流久香布春風、(雅章) ①  
まのあたり 面と向つて、そこへ行て、②六田の渡 一に六田  
の淀といふ。吉野村の北にある渡し、水岸に柳多きを以て柳之驛  
の名あり、吉野に遊ぶもの皆之を過ぐ。

かわづ鳴く、六田の川の、川柳の、根もころ見れど、あかぬ  
君かも、  
(萬葉集)

吉野山

③すでに もはや此邊ですら……④吉野宮 後醍醐天皇の靈を  
祀る、宮幣大社なり、⑤村上義光 信濃の人、源彌四郎信泰の  
子、通稱彦四郎、護良親王に従ひて十津川に逃れ、後吉野に入る。  
親王の軍利あらずして走るに及び義光身を以て之に代る。芳烈  
美談人皆之を知る。墓は吉野山二十五丁目にあり。この邊吉野  
城の外郭にあたるならんといふ。⑥とぶらふ 追善追福をする  
こと、⑦満目 みる限り、⑧これはく 唯あつと感歎するの  
みにて形容の詞なきなり。作者は安原貞室、この人は京都の俳  
人にて貞徳の門人なり。延寶二年歿す、年六四、⑨吉野の町  
吉野川の南、金峰山の下、戸數三百、旅亭あり⑩藏王堂(だう)

## 吉野山

大塔宮の兵を擧げたる時、こゝによりて守備す。◎大塔宮(たいたいのみや) 後醍醐天皇の第三子護良親王、◎別離(わかれ)の宴 元弘三年春、大塔宮は吉野を落ちさせ給ふ、其時の主従のわかれの酒宴なり、◎吉水(きすい)神社 元は藏王堂(ざうおうどう)の僧坊(そうぼう)なりしも今はかくいふ。藏王堂を距ること三町、◎行宮(ぎゆう)天子の假宮(かりみや)◎御製(ぎよせい)天子の御歌、皇后のは御歌といふ、◎花(はな)にねて……花の下(はなのした)の假寐(かりみ)を餘儀なくするまで世は亂れに亂れた。かうなつた上は仕方がない、ごんな憂(うれ)き目(め)にあふともそれを忍んで、たとひ枕の下(まくら)に石走る音をきながら起きふしをしても、賊を平げねば承知せぬ。……と慷慨(かうがい)の旨を述べられたるなり。よしやは縦(たて)ひ

## 吉野山

といふ義、石(いし)はいはと訓む、◎如意輪寺(にぎいりんじ) 宇塔尾(うたお)といふところ  
にあり、昔如意輪塔(にぎいりんたふ)ありたりといふところ、◎楠木正行(くすのぎまさゆき)……楠木正成の子、延元元年父の戦死せる時年十一、誓つて賊を討ち父の志をつがんとす。後高師直(かこうしちく)の軍六萬來り攻む、正行弟正時等百四十三人と共に一死君に奉ずるを誓ひ、吉野の行宮に詣り奏す。同盟の姓名を壁書したるはこの時なり、◎決死(けつし) 戦死を決心する也。奏請の言中に曰く『方今高師直、師泰等來り攻めんとす、これ臣等忠を盡すの秋(あき)なり。彼を獲ること能はずんば臣等の首を彼に授けん、勝敗の決この一戦(いっせん)にあり、願くは一度天顔を拜すを得むか』と、◎かへらじ……弓が絃(つる)を離れたるやう



吉 野 山

に、臣等は決死といふ覺悟を豫てよりなしあれば、死出の旅に、  
 今その姓名をこゝに書きとむるなり……の意、かねては兼てに  
 あらず、豫てなり、前以てなり。あづさ弓は枕詞、いは入る  
 と射るとかけたり。こゝにては入るなり、此時同志皆髪を截り  
 佛殿に納めて發す。正行時に年二二、<sup>⑤</sup>陵(りよ)みさゝぎ、帝  
 王の墓所、<sup>⑥</sup>行幸……三年、建武五年崩御、されば三年より五  
 年迄なり、行幸の事讀本卷九にあり、<sup>⑦</sup>北方の天 北朝に對す  
 る怨を懷きての意。北の方、京都に歸り得ぬを恨みてとするは  
 意弱し、<sup>⑧</sup>崩御 帝王の死をいふ<sup>⑨</sup>御心事 御心もち<sup>⑩</sup>禁し難  
 し、<sup>⑪</sup>禁めかねる<sup>⑫</sup>竹林院 眺望の佳きを以て名あり、皇后陛下

吉 野 山

の行在所となれる事あり、群芳園ともいふ、<sup>⑬</sup>水分(みく)神社  
 水分山にあり、今は子守明神といふ。水の分配を司る神の在  
 すところ、この神に雨を祈れること古書に見ゆ、<sup>⑭</sup>金峰(きんぶ)神社  
 延元の亂にこゝを行在所となす、<sup>⑮</sup>金峰山下にあり。安閑  
 天皇を祀るとの説あれど蓋し誤ならん、天正年中<sup>⑯</sup>金剛藏王權現  
 を安置す、<sup>⑰</sup>麓の花、<sup>⑱</sup>中の花、……これ櫻に遅遠あるなり。六  
 田の渡よりこの奥の千本(金峰神社の邊)まで約一里あり。麓と  
 こゝとは開花の速さと遅さとあり、麓の花の盛りなる頃、頂は  
 咲きそむるなり、<sup>⑲</sup>歌書よりも 此其角の句と稱せらるれど  
 もそは誤りにて、各務支考の句なり、この人蕉門十哲の一人な

## 吉野山

り。美濃の人、禪僧より轉じて俳人となる。美濃風即獅子門の一派を開く、享保十六年歿す年六七、著書多し。句意は「吉野山は歌などによまれてある故、それにて有名なり。されど人をして深く感せしむるは、それら歌書よりは、却て太平記などの軍書の方にある。一目千樹の美觀よりも、逆賊に對する慷慨悲憤の情が遙に人を刺戟するとの意、◎五十七年間 南朝三代、五十七年間なり。延元元年より元中九年までを指す。三代は後村上、長慶、後龜山をいふ。◎離宮 應神天皇の時こゝに離宮ありき。其後奈良朝に至るまで代々の天皇こゝに行幸せらる。

## 吉野山

## 備考

◎吉野山山中の總名なり。此山の花一時に開かず、上中下の候あり。大概立春より六十五日に當る頃を最中とし、麓の花過ぎて中路の花盛に、中路過ぎて上の花開く、其間三十日。昔より櫻樹一切の伐採を禁じ、藏玉權現の崇ありと稱せらる、(吉田氏、大日本地名辭書) ◎金峰神社も、如意輪堂も、南北朝時代のものにあらず、兵火の爲めに失せて其後建立せるものなり、◎よしの山たゞ大雪の夕かな。  
野 水

◎よしの山入にし人は音せねど夕の鐘のありかをぞ知る。

加茂 眞淵



## 山 野 吉

ひ、且歌書と軍書とを對照せしめたり。

## 語法

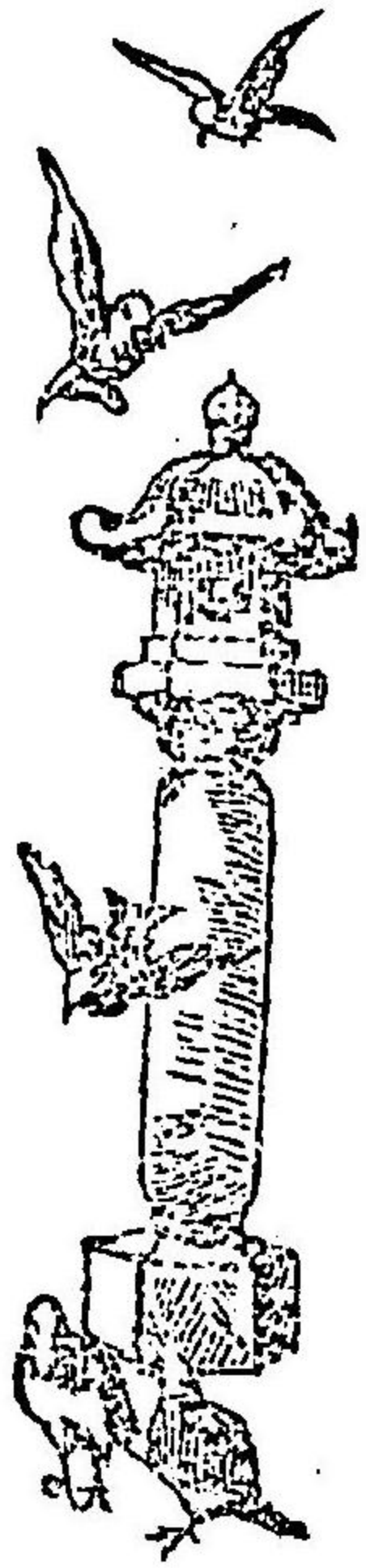
◎吉野山の歌 吉野山は總主。限りは主語。けりは感動詞。霞の奥は知らねどもは副詞節。

◎よのあたり 副詞的修飾語。◎六田の渡を渡りて 渡(ワタ)は他動詞の名詞形則ち轉來の名詞。渡り(ワタ)は自動詞の連用形、同一の動詞にて或は自動詞に、或は他動詞に用ひらるるもの尠からず。

◎花にねて……此歌は全體が一つの副詞にして主語及説明語を省けるものなればそれを補うてみるべし。

## 山 野 吉

◎かへらじとの歌 かへらじとかねて思へばはとむるの副詞的修飾語。あづさ弓なき數にいるは形容節にして名を修飾す。この歌は主語を省略せるものなり。



## 第二課 蜜 蜂

## 解釋

◎共同の生活 一群の團體が利害を同一にして互に相苦樂する生活、これを第八頁第八行群集生活と比較すべし。群集生活は集團して生活する事にて必ずしも共同一致して組織的生活をなすにあらず、共同生活には必ず組織あるを要す◎營々(えい)ア、クセクと奔走すること。列子に『安知ニ營營而求ノ生非ニ惑乎』とあり。

## 備考

## 蜜

## 蜂

◎共同生活及犠牲的精神は蜂群に於けると等しく、人類社會に缺くべからざる所以を知らしむべし。而して第三課に入りては、此共同生活と関連せしめて分業の重んずべきを詳知せしむべし。◎蜜蜂は貴重なる生産物を人の利用に供し、而も割合に飼養に勞費を要せざるが故に、古來偏く愛養せらる。就中、米、獨、西、埃、佛等最も隆盛なり。我國にては和歌山、愛媛、高知、福岡、熊本等の諸縣に盛なれども、概して外國とは比較すべくもあらず。この業は小農家の副業として適當するが故に宜しく民間に奨勵して福利を計るべきなり。種類にはサイプラス種(地中海中のサイプラス島に産す)、伊太利種、カアニオラ種(埃國産)獨逸種

蜜

文章の修飾體制

及日本種あり、外國種は大群をなし易きが故優良なり。

詳密なる説明文。第一節(五頁六行—同九行)先づ大綱をあげて  
蜜蜂の生活状態とその種類とを略叙し、第二節(五頁十行—六  
頁八行)は働蜂の任務と種別とにつき、第三節(六頁九行—七  
頁四行)は雄蜂の事を、第四節(七頁五行—八頁一行)は女王の  
任務と蜜蜂の分離とにつきて説明せり。第五節(八頁二行—同  
七行)は蜂群の生活状態を叙し、その鬭争に關して記し、第六  
節(八頁八行—終)は蜂の群集生活を營むを得る所以を明にして  
以て前節を結び又遙に第一節に照應せり。一結語に人類社會を

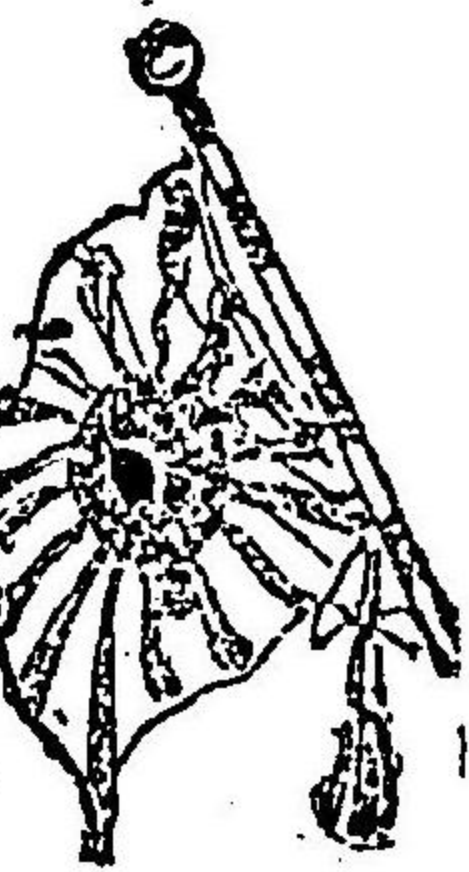
蜂

蜜

誤するが如き意あるを見ずや

語法

◎營營として 副詞的修飾語。◎臣下をひきゐて ひきゐるをひ  
きひ又はひきいと誤るなかれ。



蜂

### 第三課 分業

#### 解釋

◎分業 或仕事を爲すに、多數の人が各部分を擔任し、これを纏めて一の仕事を完成するをいふ。重荷を運搬するに、五人十人が力を合するは之を協力といふ。之に反して、一の時計を製作するに、甲は彈機を作り、乙は齒車を作り、丙は針を作るが如く分擔するを分業といふ。經濟上にいふ分業とは、生産力を高むるために行はるゝ技術上に就ていふ。分業には生産上よりみて種々の利益あり。(備考欄参照)

◎出來バエ 出來映なり、出來上つた結果。◎官公吏(くわんこうり)

#### 業 分

#### 業 分

官吏と公吏とを合せていふ。官吏は任官の手續により、官制上の公務を扱ふ役人。公吏は國家の事務を扱ふ人にして官吏にあらず。

#### 備考

◎分業とは、生産に與かる人々の各自其の爲す所を異にし、分擔を定めて勞働するの謂なり。これに三種の別あり、(一)技術的分業(二)職業的分業(三)國際的分業これなり。されど要するに、其利益は生産の額をして大ならしむるにあり。分業は如何にして此目的を達するかと云ふに、其順序方法は凡そ七つに分かる。第一、各人をして其能力と嗜好とに應じて其の所を得し

## 業 分

みることに、第二、各人をして一種の業務に専らならしむるときは、著しく熟達せしむるを得べき事、第三、見習徒弟の期限を短縮するを得べきこと、第四、甲の労働より乙の労働に移らむが爲め、費やすべき無用の時間と煩勞とを省くべき事、第五、機械の發明又は改良を爲すべき傾向多きこと、第六、生産に費やすべき資本を節約するを得る事、第七、職業をして増加せしむる事云々(中略)分業の利益に關しアダム、スミス氏の擧げたる一例を引用せむ、ス氏の記す所に據れば、留針どめはりの製造を爲すには其順序方法分れて十八段階となる。此の十八の手順を分業法に由り十人にて踐まば一日に留針五萬本を製造するを得べし。然るに同じ十人

## 業 分

にても若し各自が十八の手順を兼ね行はゞ、一日に僅々二百本を製造し得るに過ぎざるべし。然らば則ち同一の分量の勞力を用ゐて生産高に二百五十倍の差異ある譯合なり。分業の生産上に於ける利益の大なる實に驚くべし。(金井博士、社會經濟學)

## 文章の修飾體制

全篇を分ちて四段とすべし。第一段(九頁二行—同八行)は例を擧げて分業のいかなるものなるかを説明し、第二段(九頁九行—十一頁八行)は分業の利益を述べたり。分業の利は(一)製造品の質良好となり、且その高の増加すること。(二)時間の經濟なること(三)その業に用ふる器具の改良し發明せらるるもの有ること



## 分

と是なり。第三段(十一頁九行—十二頁六行)は分業の目的を完全に達するに缺く可からざる要素を明にし、第四段(十二頁七行—終)は分業と社會の文明、並に國家との關係につきて記したり。

## 語法

③ ナカ複雑ナモノデ ナカくは疊語の副詞。非常に、相應に頗る、容易に等の意に用ひらる。文語にては却て、半途にて等の用法あり。デは指定の助動詞ダの中止形なり。④ 乾イタタは過去の助動詞。タは又完了の助動詞としても用ひらる。⑤ 品物ノ出來バエガ良クテ バエは接尾語。良クテを良クツテと發

## 業

## 分

するは訂正すべきとなり。東京の中流以下の社會には此類多し、注意すべし。① 一人ノ手デ製造スルナラバ ナラは關係詞。用言の連體形につきて假定の條件を示す。② トテモ 副詞的修飾語。③ ソンナ手数が省ケテ ソンナは指示形容詞。ソノヤウナの約まりたるものにて體言の上につく。アンナ、ドンナ、コンナ等も同性質の語なり。コノ、ソノ、アノ等もコ、ソ、アと獨立して代名詞とする時は格別なれども、ノを伴ふときは指示形容詞として取扱ふを穩當とす。

## 業

### 第四課 兒島高德

#### 解釋

◎兒島高德 北條氏第十四代の執權なり、政を怠りたるより民心を失ふ。正平元年後醍醐天皇朝權を確立せんがため北條氏を討たんと謀り、事洩れて破る。元弘三年天皇再び北條氏を討たんと謀り兵を集むるや、高時官軍を破り天皇を隠岐へ流し奉る。

◎一天萬乘 一天下を統治せらるゝ天皇をさす。萬乘は兵車萬乘を有する義。◎無道(うだ)道に背く◎ちまた 巷、岐なり、道の又をいふ。こゝは世上の風説といふ意。武家即北條氏が天子を

流すが如き不忠不義をするものから、其報として自ら滅ぶるならんと風説するなり。罵りは騒々しくといふ義。◎警固の武士 北條氏の臣にして帝を警固(守る)して隠岐に向ふ侍をいふ。その武士さへ餘りの事に天皇に對して同情の涙を、流せりとのこと。◎兒島高德 備後三郎と稱す。三宅範長の子、夙に義兵を擧げて天子に盡したれども志を得ず、後に新田氏に従ふ。其終焉を詳にせず、◎志士仁人 論語衛靈公篇に『子曰志士仁人無二求生以害仁有ニ殺身以成仁』とあり。意は、仁の爲めに身を亡ぼす事はあるも、不仁の爲に命を延ばすやうな事はなし……◎義を見て、論語爲政篇に『見義不爲無勇也』とあり、義

は人の踐むべき道なり。それを避け逃るゝは勇氣なきなり、  
 ◎臨幸の路次 臨幸は行幸のこと路次はみちすがら、即ちお出  
 ましになる途中、◎心ある、義氣ある同士のもの、◎議に同ず  
 この發議はつぎに賛成する、同ずはドウズとよむ。◎今宿 現今は  
 今宿、手野の二村を合して高岡村といふ。中世山陽道の間驛  
 なりき、◎院庄 今は村名、津山の西一里半、貞享年中長尾某  
 此地に元弘二年三月の行在址を標す。美作舊跡録には高德の事  
 を記しあり、◎上聞ぶんやう 天子の御聽、◎詩の句 この句を  
 書きつけたるは、元弘二年三月の事にて美作略史には委しくあ  
 り（備考） ◎天勾踐云々、「天莫スル空スル勾踐ヲ時非ズ無キ范蠡ニ」解は本

課後節に委し、◎天顔殊に……天子のお喜び顔色に表はれて美  
 し（麗し） ◎故事（じ） 故は舊なり。古昔ありしことどもなり、  
 ◎聞え上げ 前出の上聞ぶんやうに達し奉りしなり、敬みてかくいふ、  
 備考

周敬王二十六年、夫差敗ル越ヲ于夫椒、越王勾踐以テ餘兵ヲ棲ム會稽  
 山ニ、請リ爲レ臣、妻ハ爲レ妾、子胥言不可、太宰伯嚭受ク越ノ説ヲ、夫差  
 赦ス越、勾踐反ル國、懸ケ膽ヲ於坐臥、即仰ギ膽ヲ嘗メ之、曰、女忘ル會稽之  
 恥カ邪、舉テ國政ヲ、屬ス大夫種、而與ニ范蠡ニ治シ兵、事ス謀ヲ吳、（中路）  
 越十年生聚、十年教訓、周元王四年、越伐ッ吳、吳三戰三北、夫差  
 上ル姑蘇、亦請フ成於越、范蠡不可、夫差曰、吾無シ以見ニ子胥ニ爲ニ

幟<sup>ヲ</sup>乃<sup>チ</sup>死<sup>ス</sup>、(十八史略) ⑤北條高時天皇を隠岐に遷す、三月(元弘三年)七日車駕京師を發し、播磨より杉坂を踰えて、云々、十七日院莊村に達す。賊將小山秀朝、兵數百人を率て之を護衛す……(美作略史)

### 文章の修飾體制

現寫法を用ひたる勁強の文。古軍記の風骨を得て適切に内容と調和せり。第一段(十三頁四行—同八行)は北條氏の惡逆と之に對する人々の舉措とを述べたり。これ高德の事蹟を記すの前提にして劇に譬ふれば舞臺若くは背景に當る滯分なり。⑥よろひの袖をしぼるは泣くと露骨にいはざる相換法。第二段(十

三頁九行—十六頁六行)は主人公活躍的一幕にして詳かに高德が忠誠の顛末を叙したり。分ちて四小節とすべし。第一小節(十三頁八行—十四頁十行)には高德一族を會して議を決し、主上を途に奪ひ奉らんと謀りし事、第二小節(十五頁一行—同六行)にはその計畫の齟齬せしこと、第三小節(十五頁七行—十六頁一行)には單身行宮に忍び入りて暗にその志を聞えあげし事、第四小節(十六頁二行—同六行)には主上その意を悟りて喜ばせ給ひし事を記したり。

⑦志士仁人は云々は引用法。⑧今か〜とは疊語にして省略法。而して⑨天勾踐を空しうするなかれの詩は一種の譬喩法な

り。  
 第三段（十六頁七行—終）は高德が樹櫻に書きたる詩の意義を解説したるものにして、本文の附屬部。恰も幕切れの鳴物に似たり。

## 語法

◎武家の運命も今に盡きなん。なんは未來完了の助動詞。詳説すれば完了の助動詞ぬの將然形に未來助動詞んの添ひたるものにして未來のある時において動作の既に完了してあるべき意を表す。なんは又關係詞として用ひらるる場合あり。感動詞として用ひらるるとあり。注意すべし。◎仕うまつれる。仕うは仕への音便、まつれるは敬語動詞まつるに完了の助動詞るの添ひ

たるものなり。◎笠置におはしませし時。ませは敬語の助動詞。◎かや。かもやも疑問の關係詞。二つ重ねる時は一層其意を強くす。◎高德せめても。もは感動詞。◎上聞に達せばや。ばは關係詞やは感動詞なるが二語合して希望を表す感動詞となりしなり。◎時范蠡無きにもあらず。しは關係詞もは感動詞。しは上の語を押抑へて言ふ場合に用ひらる。◎つぶさに。副詞的修飾語。

第五課 瀬戸内海

解釋

◎**點在**、點のやうに、遠近に散らばつてあること。  
 ◎**高松** 讃岐國香川郡にあり。人口三萬五千、香川縣廳あり、商船輻輳の大港なり。◎**多度津** 讃岐國仲多度郡にある商港、戸數一萬二千、鐵道を以て東は九龜高松まゐがめたかまつに、西は南琴平ことひらに通ず。◎**高濱** 三津濱みつがはまの西北街を高濱たかはまといふ、松山市の埠頭ふしづなり。鐵道は高濱より松山及郡中に通ず、この地殷賑の商港なり。◎**尾道** 備後國御調郡みつぎにあり、商業繁盛の地にして近國の貨物皆こ

ゝを經由す。◎**宇品** 安藝國安藝郡にあり、廣島の南一里にして今は廣島市に屬す。日清日露の大戦役には、この埠頭より盛に出師せり。◎**嚴島** 安藝國佐伯郡にあり一に宮島みやしまといふ。陸岸に添へる海島にして南北二里半、東西三十町許、島の北偏に伊都岐島神社いづきしまあり。松島及天橋立と合せて日本三景と稱せらる、風景絶佳のところ。◎**屋島** 讃岐國木田郡にあり、一に八島と呼ぶ、山島屋宇の狀あり。壽永二年平宗盛幼帝(安徳天皇)を奉じて海に泛びこの地に到り、四國を徇へて行宮を建てけるが、源義經に襲はれて平軍盡く舟に上り西走す。この地屋島寺に源平合戦の古器を傳へあり。◎**壇浦** 長門、下之關海峡の東

瀬戸内海

口の北岸なり、壽永四年平家滅亡の地なり。◎感興 人の感情を刺戟して一種の興味を起さしむること。

備考

◎語句の難解なるものなし。全篇地理◎歴史◎を基礎として美的趣味を興ふるを主眼とす。先づ風景の美に富めるは山◎と水◎の配合にあり。海岸線は屈曲多く、且つ島嶼に富む。山は花崗石にて成り樹木繁茂す。既にこれ美なり。更に歴史に溯れば、一山水、皆これ思出多き哀歌悲史なり。今はたゞ古來詩人の詠を以て補ふにといめん哉、◎「島がくれ行く」は次の歌より出づ◎ほのくくと明石の浦の朝霧に

島がくれ行く船をしぞ思ふ。

人 磨

其他、

◎白波に羽打かはし濱千鳥

かなしきものは夜の一聲。

重之集

◎送人遊赤石

紅亭綠酒暫相留、 羨爾揚帆赤石遊、

試見烟波朝霧裡、 依微島樹隱行舟、

◎須磨の浦や汀に立てる磯馴松

しづ枝は波のうたぬ日ぞなき。

俊 頼

◎力なう入かゝる日や須磨の秋。

涼 菟

瀬戸内海

◎松影や月は三五夜中納言。

貞室

◎おぼろ夜やことさら須磨のふる籬。

既白

◎赤間關

藪慙

長風波浪一帆還、碧海遙廻赤馬關、

三十六灘行欲盡、天邊初見鎮西山、

◎壇浦夜泊

木下業廣

蓬窗月落不成眠、壇浦春風五夜船、

漁笛一聲吹恨去、養和陵下水如烟、

### 文章の修飾體制

層々單文を重ね來り、勁強の筆致、詳に瀬戸内海の風光を描く、

宛も一幅の活畫を観るが如し。第一節（十七頁五行—同九行）内海の位置を示せり。之を第一段とす。第二節（十七頁十行—十八頁七行）は總括して内海一般の狀景風致を寫し、以下別別に之を細説せり。即ち第三節（十八頁八行—十九頁五行）は主として陸地の風物を叙し、四季折々の景色を描き、第四節（十九頁六行—二十頁一行）は海上の眺望、第五節（二十頁二行—同四行）は港灣船舶の事、第六節（二十頁五行より同七行甚だ切なりまで）は勝地に就きて述べたり。我が邦に遊べる西洋人は以下結末まで、再び之を總括し、西洋人が賞讃の辭を以て筆を收む。以上は第二段にして内海の風光を描寫せり。



瀬戸内海

◎第一節、佐田岬長く突出で九州にせまりは擬人法。第二節、一島末だ去らざるに一島更に現れ。島轉じ海廻りも亦然り。◎このあたり對句を用ひ語句を洗練し、恰も唐詩を讀むが如し。◎第三節、春と夏と、及び秋の山と冬の木とを照對せしめたり。眠ると目覺むと、紅葉の錦と白雪の綿と亦然り。此の邊皆對句をなす。◎眠るが如く、毛氈を敷けるが如くは第四節の鏡の如くと共に比喻法。◎島がくれ行く白帆の影は人麿の「ほのく」と明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」より脱化せる一種の引用法なり。

語法

瀬戸内海

◎近く九州と云々 近くは形容詞の副詞形。◎相接せんとする所 相接せんは熟語動詞。相接すの將然形に未來の助動詞んがつきたるものなり。◎細長き 熟語の形容詞 ◎島がくれ行く島がくれは副詞的修飾語。◎白帆の影ものごかなり のごかは形容動詞



## 子の海は我

## 第六課 我は海の子

## 解釋

◎親子の間には、溢るゝばかりの情味ありて、離るべからざる因縁あり。我の海に於けるは、宛がら子の親に於けるが如し。海は我が最も敬ひ且つ最も愛するもの、我は海の愛子なりとの意。◎海の子 海と我との親みの度を示したるまでなり。◎白浪(なみ) 打寄する時白く見ゆる浪◎磯邊(いそ) 波打ち寄するあたり。◎ごまや 苫屋、菅又は茅にて覆ひたる屋根の家、海岸の漁家に多し。◎住家 すみかど訓む。

## 子の海は我

◎しほ 潮なり、うしほなり。◎浴 ゆゑみと訓む、身體を洗ふ事。◎子守の歌 嬰兒の時は、浪音を子守歌と思ひつゝ、聽き、而して其浪音に慰められ且つ眠りたり。◎千里 遠方よりの意。◎海の氣 海邊の空氣には一種の香氣あり、其香ある海氣を吸うて童となれるなり。◎わらべ 童にて嬰兒の長せるをいふ、七八歳前後。◎いその香 磯の香なり。磯に下り立つ時は一種の香氣強く鼻を刺戟するあり、つくは刺戟なり。◎不斷の花 浪の碎けて散る時飛沫を生ず、それを花とみたるなり。草木の花は開落あれども、この浪の花は春夏秋冬咲く故に、不斷の花といふ。其花の香はこれ磯の香なりとの意。◎なぎさ 渚にて

## 我の海は子

波際淺の義。渚、汀など書く。波打際に近くの意。①いみじき秀れたる。②ろかい。ろ、かい、は櫓、櫂、なり、共に舟を進行さする器械なり。③操りて(つり)巧に取扱ふこと。④浪枕舟中に寝て浪音を枕にきく。⑤尋(ひろ)六尺又は八尺の二説あり。こゝにては深き程をいふなり。⑥幾年(いく)五年も八年も。⑦かひな、腕、⑧赤銅さながら。こゝは色の似たるをいふ。赤銅は銅百分と金一分乃至十分よりなる紫黒色の合金。さながらはその儘の意。⑨たいよふ氷山。漂流する氷山なり、氷山は北海より流れ來れるもの、⑩たつまき。龍巻なり、海上に颶風の起る際海水を高く空に巻き上ぐるをいふ。それを龍の仕業なりと思

## 我の海は子

へるよりこの名あり、⑪いで。呼びかけて人をうながす詞。⑫海の富。海産物をいふ。海には魚貝より、珊瑚其他の貴重なる産物、無限に出るものなればかくいふ。⑬海の國。我日本帝國の如く四面海を環らす國、又は海に接近する國なり。國家保護の重任に當らんとは、立派なる海軍々人となりて日本帝國を保護せんとなり。

## 文章の修飾體制

七五調の韻文。豪壯の辭を驅つて海國男子の本領を歌ふ。壯絶快絶、一讀懦夫をして克く奮起せしむ。第一節、我は海の子、起首先づ大綱を提げて全篇を括約し、白浪の以下その住家をい

## 子の海は我

ひ、第二節、生ひ立ちにつきて、第三、四節、その生活につきて述べたり。而して第三節は海邊に於ける日常の様を寫し、第四節は海上に於ける活動の状を描く。①不斷の花のかをり、遊びなれたる庭は皆譬喩、②百尋千尋は誇張法にして而も定數を表す語を用ひたるため數百千尋などいはんより一層鮮明なる印象を讀者に與ふるを見る。第五節にはその逞しき筋骨を表はし、第六節にはその衝天の意氣を示せり。③鐵より堅きかひなは誇張法。④赤銅さながらには譬喩法なり。さながらにといひて以下「見ゆ」などいふ語を省きたるところ餘韻嫺々たるものあり。⑤浪にただよふ以下の文と海まさあぐる以下のとは全部對

句をなせり。第七節も亦對句法を用ひ、反覆いで、いぞと呼び起して快男兒の大覺悟を説き、以て遙に起首に照應す。これ一篇の眼目なり。⑥我は拾はん海の富は倒置法。我は護らん海の國亦然り。

## 語法

①吸ひてわらべとなりけり には完了の助動詞。けりは感動の助動詞。けりはまた過去の助動詞として用ひらる。②行手定めぬ浪まくら 浪まくらは熟語の名詞。③幾年こゝにたさへたるきたへは波行下二段活用動詞なるを以て、きたひなど書くは誤なり。④來らば來れ恐れんや 來らばは假定の條件を示し

## 子の海は我

來れは動詞の命令形なり。假定の條件に對して命令形を用ふるは當然のことなり。これ命令は發して後其動作を起すものなれば、時間の關係未來に屬す。

◎我は拾はん海の富 我は護らん海の國 何れも文の成分を倒置したるものなり。成分の倒置は修辭上必要なることあるを以て兒童に對しても練習せしむるを要す。



### 第七課 車と船

#### 解釋

◎都大路(みやこ)をねり行、都の幅廣き路を緩く進み行く。◎絲毛の車 絲にて蓋を葺きたる車なり。毛とは葺くといふ意にて羽毛の毛にあらず、絲の色によりて、青絲毛車、紫絲毛車、赤糸毛車等あり。古は院、皇后、東宮、内親王、攝政、關白等之を用ひたり。牛をつけてひかすむ。圖に示せる二本の長さ棒を轆といひ、轆の端二本を結びつけたる横木を軾といひ、人を容る、蓋あるを箱といふ。◎自動車、瓦斯、蒸氣、電氣等の力によりて

車 と 船

運轉せらるゝ車、西紀一八二四年英國にて創造せらる。其後獨、佛等に發達し今日に及べり。◎荷足 河上の運漕に使用する船  
 ◎高瀬 底淺くして平たく、河上の運漕に使用せらる。荷足は小なれども、高瀬は大なり。◎茶船 これも運送用の川船なり。◎屋根船 小舟に屋根を造りあるもの、舟遊などに使用する。◎石  
 ◎日本船は石を以て積量を示す。一石は十立方尺なり。◎ス、  
 プ兩氏のと、第九卷に詳解せり。◎噸(とん) 「アヴォイルヂュポ  
 イス」衡の單位にて二二四〇ポンドの稱、我國の二七一貫に當  
 る。こゝに注意すべきは商船と軍艦との噸數計算の相違なり。  
 商船は船内の容積噸數を計算し、軍艦は艦の重さ、即ち軍艦が

車 と 船

海上に浮びたる時に、其重量の爲めに排壓せらるゝ水量をいふなり。

◎空中飛行器 獨逸人リリエントール氏は飛行器を製作し、一八九一年より一八九六年まで約二千回の飛翔を行ひしが、風の爲めに轉覆され、百呎の高處より墜落して死去せり。氏は空中飛行の鼻祖なり。米國人ライト兄弟は、千九百五年九月自家創造の飛行器にて、十八分八秒間に十一哩百二十五嗎を飛行して優勝と稱せられしが、三年後には佛人ル、マン氏は、一時五十分間に九十五哩を飛行することを得て効果を收めたり。一九〇九年に佛人ブレリオ氏は飛行器を案出し、英佛の海峡を横斷

車 と 船

しだり。今日も文明諸國に於て盛に研究中なり。其製作に於ては、雙翼飛行器、單葉飛行器等其他種々あれども、現に研究中なれば一定せず、我國にては飛行器の進歩未だ幼稚にして語るに足らず、輕氣球は明治十年に創造せられたるも、軍用として用ふるに及ばず。明治三十年に山田猪三郎自ら輕氣球を製作し三十七年には、旅順攻圍軍にて偵察用となし効果を收めたるのみ。飛行器に就ては一も誇るべきものなし。

文章の修飾體制

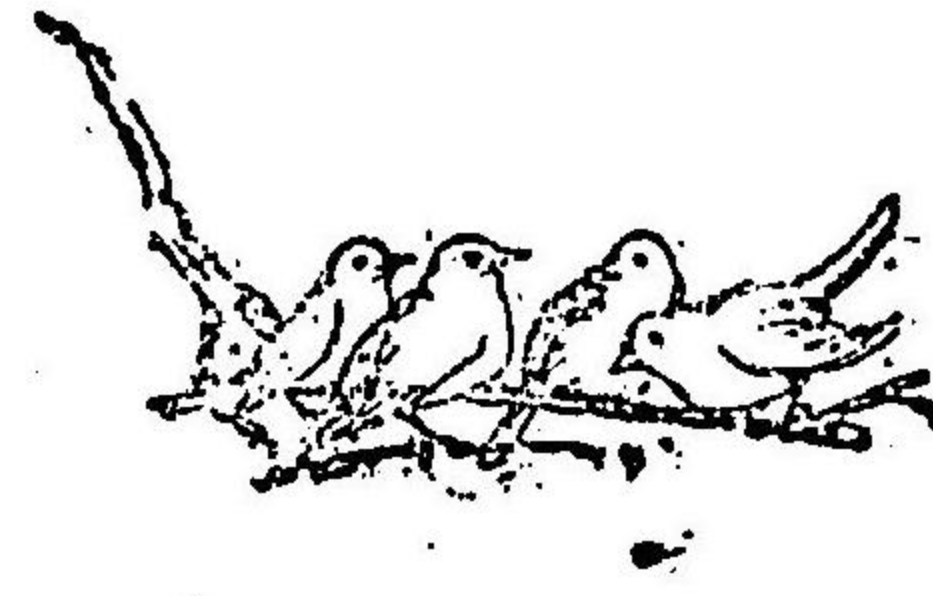
第一節(二十四頁七行—同十行)は一篇の總序、先づ車と船との種類、古今の相違につきて略叙す。以下は順次之を細說せる

車 と 船

ものなり。されば、本篇の組織は頭括式によれりと知るべし、第二、三節(二十五頁一行—廿六頁四行)には車の種類を擧げ、詳に古今の變遷を説き、第四節(二十六頁五行—二十七頁四行)はくさぐさの船舶につきて述べ、東西を比較したり。第五、六節(二十七頁五行—二十八頁九行)筆を轉じて汽車汽船の進歩を説き、先づ西洋に於ける狀況を明にして次に我邦のに及び、第七節(二十八頁十行—二十九頁三行)は軍用の車と船とに關し、第八節(二十九頁四行—終)には更に空中飛行器の事を叙し人智の進歩の際限なき事を述べ、序説「誰か人智の進歩の大なるに驚がざらん」に呼應せしめ、以て一篇を結收せり

語法

◎如何に優美なりけん けんは過去の事物を推量するに用ふる助動詞。◎ひとへに 副詞的修飾語。◎乗合舟ののどけさよよは感動詞。勇ましさをよのよも亦同じ、よは文の末或は體言の下につくを普通とす。



第八課 我が海軍

解釋

◎上古の武神 鹿島神宮の建御雷神、香取神宮の經津主神を祀れるをいふ。天照大神が、皇孫瓊々岐尊を國土に降さんとせられし時に方り、大國主命は出雲を本據として、山陰山陽に威を振ひ居りたる故に、大神は建御雷神を主將とし、經津主神を副將として征伐せしむ。兩神この國土に降り、大國主命及其子事代主命を屈し、其他を服し、征戰功を奏して歸り大神に奏す。かく平定したる後に天孫降臨の事ありたり。香取、鹿島は、



## 我が海軍

神社といはずして、神宮といふ。③野分(のわ)秋冬の頃の烈風。  
 ◎如月(らぎ)は二月。彌生(やよいひ)は三月。卯月(うづき)は四月。水無月(みなづき)は六月。  
 長月(ながづき)は九月。菊月(きくづき)も九月の異名。以上何れも陰曆なり。◎優(ゆう)に  
 品よきと、しとやか。◎シノバル 思ひやらるゝこと。◎眞  
 鶴(まなづる) 眞名鶴のこと、白鶴。◎第何號艇 水雷艇に一等、二等、  
 三等、四等とあり。一等は千鳥、眞鶴のやうに名稱あり。二等  
 より四等までは第何々號艇といふ。◎大なる大砲 我國及英米  
 にて普通採用せられ居るは、最大の十二吋砲、以下十吋砲、九  
 吋二砲より、漸次小口径のものに至る。◎艦の要部 舷側、水  
 線部、巨砲塔、司令塔、火薬庫等を指す。◎運送船、商船 戦

## 我が海軍

時と雖も商業貿易は平時の如く營むべきなり。故に海軍は、自  
 國の商業貿易を保護せざるべからず。こゝにいふ運送船とは、  
 陸兵又は軍需品を輸送するものを主として指す。これ運送船、  
 商船には戦闘威力なき故に、軍艦にて保護するなり。◎主力  
 最も強盛なる艦、又は艦隊。◎船脚 水にひたる部分。◎魚形  
 水雷 水雷に種々の型あり。これは魚の形狀をなしたる水雷に  
 て、發射して水中を進行せしむるに適する型をとれるなり。沈  
 設する水雷はこの外。◎特別任務 これは皆直接戦闘に參與せ  
 ず、艦隊に附隨して或は軍需品水雷を供給し、艦の破損を繕ひ、  
 又は石炭を補充する役目あり。要するに戦闘威力の缺乏を補ふ

ためなり。⑤驅逐艇、水雷艇、潜水艇、この三つは水雷發射を主要任務となす。故に名稱は異なるも相似點甚多し。驅逐艦は實は大水雷艇にして、水雷艇は小驅逐艦なり。唯排水量噸數に於て差別あるのみ。之を列國の實際に徴するに、百四五十噸迄を水雷艇といひ、二百噸以上を驅逐艦といふ。但水雷艇は、驅逐艦の如く他の水雷艇を驅逐するを要務とせず。(其他備考参照)

## 備考

⑥強大なる海軍を要する理由は(一)國家防禦(二)商業保護に歸す。今この參考として小栗海軍大佐の説を引用すべし。

第一。平時に於ける海軍の任務と其効用。

## A、外交上の關係

- (イ) 外交談判に於ける外交官の後楯、平時封鎖、商船抑留
- (ロ) 局外中立の實行 (ハ) 國交上の儀禮を鄭重にする事 (ニ) 居留外人をして敬意を表せしむる事 (ホ) 在外邦民をして慰安奮勵せしむる事。

## B、經濟上の關係。

- (イ) 貿易の發展を助くる事 (ロ) 海員の供給 (ハ) 不用軍艦の利用 (ニ) 水路測量、圖誌及測器試験と海上事業啓發 (ホ) 造船造機等、工業上の改良進歩を促す (ヘ) 密漁取締 (ト) 局外中

## 我が海軍

立の場合に商人の利益を保護する事。

C、殖民政策上の關係。

殖民地の維持連絡及誘導。

D、内政財政學術其他の關係。

(イ)海上難破船救濟 (ロ)検査規則の勵行 (ハ)海上密商取締

(ニ)海賊其他海上保安警察 (ホ)氣象海流其他の觀測及海難通

報。

第二〇戰時に於ける海軍の任務と其行動。

A、攻勢に關する行爲。

(イ)偵察見張搜索 (ロ)前進根據地の設定 (ハ)艦隊攻撃 (ニ)軍

## 我が海軍

港其他要地の攻撃及封鎖 (ホ)沿岸威赫交通杜絶 (ヘ)海上貿

易破壊。(敵船捕獲、中立船臨檢)。(ト)通信法の設定 (チ)陸

軍上陸地の選定 (リ)陸戦隊の上陸と敵地の占領 (ヌ)陸軍護

送 (ル)陸軍上陸掩護 (ヲ)陸軍作戰の牽制 (ワ)軍需一切の運

搬供給 (カ)我海上貿易及航路の保護。

B、防勢に關する行爲。

(イ)軍港其他要地の移動防禦 (ロ)沿岸交通の防禦 (ハ)海陸固

定防禦の設備 (ニ)偵察見張 (ホ)敵艦隊の奇襲。

(最新海軍通覽に據る)

◎軍艦に種類多し、各種の軍艦相合して艦隊を編成する時は、

共同動作をとる事陸軍の各兵種に於けるが如し。卷九、「我が陸軍」を参照すべし。◎本課に於ては海國の小國民に向て軍事的知識を普及せしむるを以て主旨とす。

### 文章の修飾體制

三段より成る。第一段（廿九頁九行—三十一頁六行）は艦艇の名稱につきて述べたり。劈頭「諸子は數多ある我が軍艦の名を知れるなるべし」は此の段の綱領にして、以下軍艦、驅逐艦、水雷艇の名稱につきて順次之を説明せり。動もすれば乾燥無味に陥り易き説明文なれど、諸所に簡單にして面白き評語（例へば「驅逐艦の名こそ更に優美なれ」の如し）を挿みて巧に潤色を

加へ、讀む人をして倦まざらしむ。第二段（三十一頁七行—三十五頁五行）は艦艇の任務并に構造の概略を述べたり。此段も亦劈頭に綱領を示し、「諸子は……任務を知れりや」といひ、次いで戦艦、巡洋艦の任務構造、海防艦の任務、砲艦、通報艦、驅逐艦、水雷艇の任務構造、潜水艇、其他の任務を序説せり。以上、第一、二段共に、先づ問題を提起して大綱を掲げ、次いで之に答へて細目を明にす。一種別様の文趣といふべし。第三段（三十五頁三行—終）我が邦の地勢を述べて海軍の必要を説き以て全篇を總括す。かくて本文の組織は珍しき尾括式を探れり。

## 第九課 臺灣より樺太へ

## 解釋

◎總督府の經營、總督府は總督が政務を取扱ふ役所なり。其政務によりて國家の方針に基き、新領土を發達せしめんとする萬般の施設を經營といふ。臺灣は明治二十七八年戰役の勝利によりて、下、關條約の結果日本帝國の版圖に歸したり。

◎臺北市街、臺灣の首都にして、總督府以下各官廳の所在地なり。人口一萬二千、我が中央政廳のある所。明治二十八年來市區改正を計畫し、内外下水、道路の改修をなし、城壁を毀ちて

市街を擴張せり。市街の中央に臺北公園あり。◎井然、(せいじん) きまりのよき事、秩序の整ひ居る事。◎臺灣神社、臺北の北一里にあり。◎大國魂命、おほくにたまひこと、◎大己貴命、おほなむちのみこと、◎少彥名命、すくなひこのみこと、并に北白川宮能久親王殿下を合祀せる官幣大社なり。明治三十三年起工、翌年竣工、三十四年十月廿二日鎮座式を舉げ、同二十八日大祭執行、其後この日を例祭日となす。この神社造營の議は北白川宮薨去の際に起り、次て貴衆兩院の建議となり、明治三十年に至りて議熟す、同年九月當時の乃木總督は建設取調委員を設くるに至れり。

◎そいろ、何となく心の進み行くさま。漫すすろにと同じ。

## へ太樺りよ灣臺

◎當年、明治二十八年一月、北白川宮能久親王殿下には近衛師團長として臺灣に出征せらる。臺北の近くに上陸せられて以來、櫛風沐雨、兵士と寢食を共にせられて南進あらせられしが、蕃地の瘴氣に惱まさせられて同年十月薨去、御年四九。

◎西部縦貫鐵道、北は基隆及淡水港を起點とし、臺北に合し、臺中、臺南を経て南、打狗港に達する縦貫線をいふ。西部とは、王化に浴しつゝある、比較的開け居る一帯を指す。東部は蕃民にして皇恩に浴せず。◎産業、生産業なり、農産物を首め、すべて生活上必須の物資を生産する業。◎築港、天然の地勢に人工を加へて完全なる港にするに於て、浚渫をなし埠頭を築く等

## へ太樺りよ灣臺

をいふ。◎樟腦、樟木より製造採取したる六角形の結晶體なり、白色にして香氣強し。防腐劑及興奮劑として使用せらる。◎水牛、熱地に産する哺乳動物にして、體長七尺以上に及ぶものあり。粗剛にして黒色の毛を有す。◎廣東婦人、臺灣住民の最大多數は、古より移住し居たる廣東人、福建人なり。これ等は臺灣開發の主動創始者なり。こゝにいふは廣東婦人の農耕に従事するものなり。◎氣根、植物の根は多く土中にあるも、これは大氣中にありて、それより養分を吸収するなり。故に氣根といふ。空中に露出する根の意。◎舊蹟、昔何等かの事件のありたる跡。◎阿里山、阿里山は新高山の西方に連る山系にして、海

拔九千六百尺あり。森林は海拔四千五百尺乃至八千二百尺の間のみにて、面積約一萬一千町歩あり。檜の純林にして間々松杉等を交ゆ。最近調査によれば、樹數約一百万、材積二千八百万尺あり、内地の木曾山林といふも遠く及ばずといふ。◎尺(じやく)材木の體積の單位にして、一尺角長二間の體積をいふ。◎無盡藏 いくら採取でもなくならず、際限なくある事。◎寫真帖 寫真を集めて一冊に綴つたもの。

## 備考

◎新領土臺灣の地理、物産、交通の如何を教へたるもの、併せて國運の發展に説き及ばすべし。

## 文章の修飾體制

前文(「一別以來」より「今尙冬の季節と存候」まで)、本文、結語(草々)より成る。前文にては先方の安否を尋ね、又季節につきて挨拶す。本文は二段に分つべし。第一段(三十五頁十行「當總督府」より四十頁八行「大賀の至に御座候」まで)は臺灣の狀況を報じたるものにして、第二段(本文の殘部)は寫真帖を贈る挨拶なり。而して第一段を視るに「當總督府の經營も」より「聞きしにまさる進歩に驚入候」までは、臺灣の狀況に關して先づ其梗概を叙説し、以下順次之を細説す。即ち、三十六頁三行「當臺北市街の如きは」以下三十八頁六行「殊に興味を

## へ太樺りよ灣臺

「覺え申候」までは、主として北部地方の状況を述べ、市街、港灣の發達、鐵路開通の結果等につきて記し、又同島の重要な産物を挙げたり。三十八頁七行より四十頁三行までは、中部并に南部地方の模様につきて、以下第一段の終までは、臺灣の住民に關して叙説し、王化の漸次普及する事を喜べり。

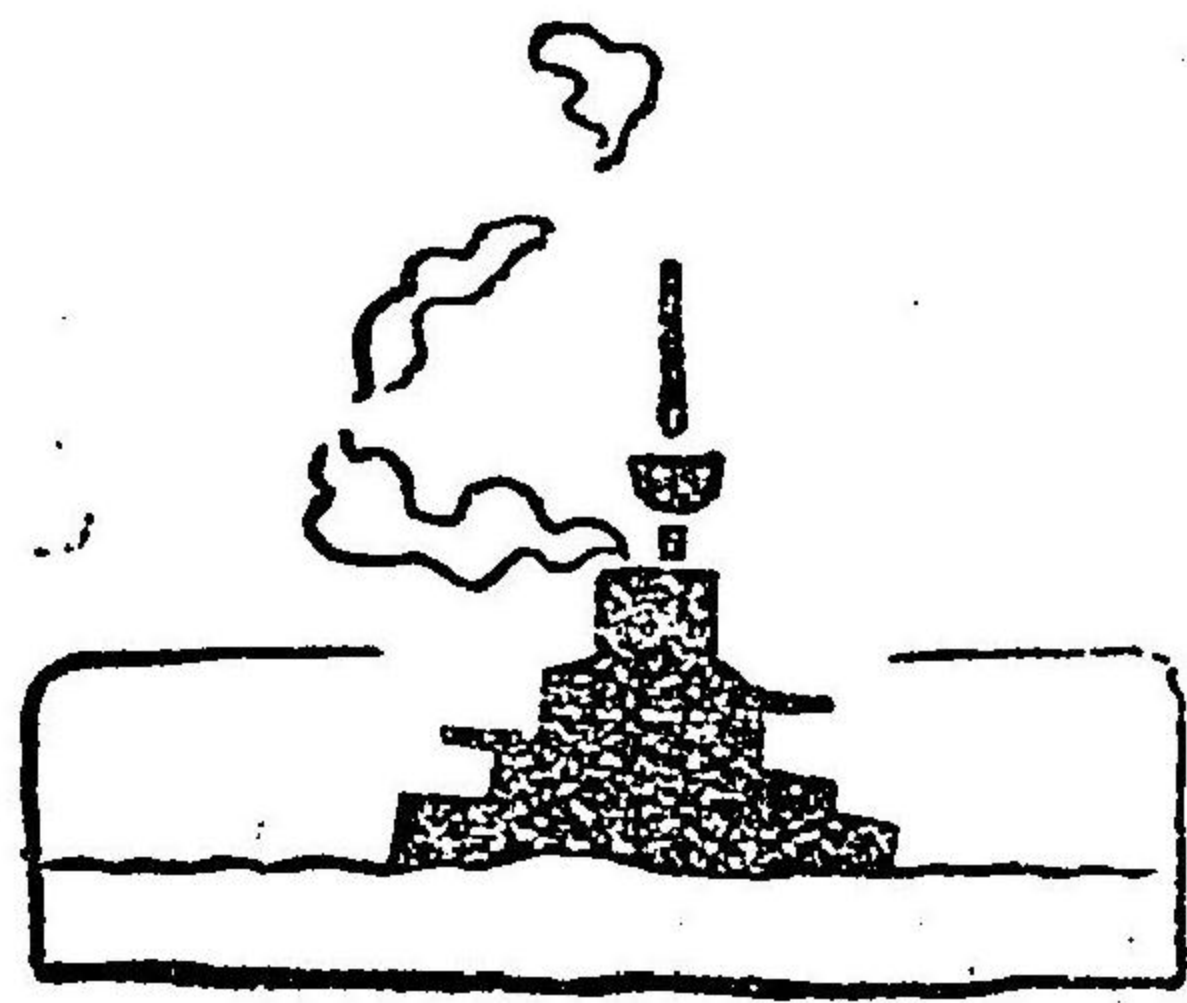
此文の如く、自己の名のみを署し、又先方の名のみを書く事は、極めて親密なる友人に限りて行はるる風なり。非常に尊敬する人に對しては、自己は名のみを記し、先方は氏のみか又は氏名を記すべく、又同輩若くは目上のものに對して、自己と先方との氏名を共に記すは可なれど、自己の氏のみか又は氏名を記し

## へ太樺りよ灣臺

て、先方の名のみを書く事は甚だしき失禮なり。注意すべし。

## 語法

- ◎御變りもこれ無く。これは接頭語。これゐりのこれも亦同じ。  
 ◎そいゝに。副詞的修飾語。  
 ◎今や。やは感動詞。





第十課 熊王丸

解釋

◎南北朝 足利尊氏叛し、九州より大舉東上、光明天皇を立て、後醍醐天皇に迫りて神器を傳へんことを請ふ。後醍醐天皇は神器を持して大和國吉野に幸し行宮を營む。時に延元元年十二月なり。これより吉野を南朝といひ、京都を北朝といふ。◎赤松光範 正平中、足利氏に従ひて吉野を犯し、後常に官軍(南朝)に寇す。範資の子なり。◎楠木正儀 正成の子正行の弟、兄の戦死したる後河内に居たり。後半生の去就に就きては非難すべ

熊 王 丸

熊 王 丸

き點あり。◎散々(ざんざん) 残るところなく、見る影もなく。◎熊王 宇野正寛なり。◎心許なし(こころ) 不安心、覺束なし。◎幼き時に………その下に『本望をとげ得べけれ』とやうの意を言外に含む。◎勞りて(いた) 慰めすかして。◎具足一領(ぐそ) 甲冑一そろひ。◎涙せきあへず、涙のとめきれぬ事。◎元服(げんぷく) 昔は男子成人すれば服を改め髪を理して冠をつけたり。其儀式を元服といふ。此時幼名を廢して新に名を命ず。熊王は幼名にてこの時正寛と名のり出せるなり。◎泣號(なき) 聲を出して泣き叫ぶなり。◎もどどり 髻なり、髪を結びつかねたるところ、たぶさなり。◎往生院 河内國中河内郡

## 熊 王 九

にあり、天平中僧行基の開祖。◎心の變る。正儀を殺せば孝の道は立てども君恩に對して申譯なし。正儀に事ふる時は忠義は立てども、父恩に對して申譯なし。故に双方をのがれて出家したるなり。心の變るとは、君と仰ぐ正儀に對して再び事へる氣になるか、將又殺す氣になるかと云ふことを心配して、それらの動機の起らぬやう、外界に觸接せずに後生を願ひ居るなり。

## 備考

◎この事吉野拾遺にあり。つきて見るべし。◎住吉の戦は正平七年、楠正儀、和田正忠と力を協せ、夜陰に進軍して、味爽細川顯氏の陣を破りたり。赤松光範は細川勢なり。◎恩愛深き武

## 熊 王 九

將の優しさと、兼ねてまた古武士が父に對する孝心と、君に對する忠義の心とを思ひやるべし。忠と孝との間に彷徨する少年の衷情に向て、宜しく深き同情を表すべきなり。

## 文章の修飾體制

第一段〔南北朝の頃〕より二行目「散々に撃破られたり」まで）赤松光範の敗北せる事を叙す。これ一篇の事件の起因なり。第二段〔此の時〕より四十二頁十行まで）熊王固く主君に請ひて君父の仇を報せんが爲、正儀を刺さんとして出發したる事を述べたり。光範の言「六郎の形見とも思ふものを」、熊王の語「幼き時に参りてこそ」、何れも次に來るべき語を省略して、一は綿

## 熊 王 丸

々の情緒を惹き、一は斷々の決意を示す。第三段（四十三頁一行―同十行）は熊王始めて正儀に仕へし事を記し、第四段（四十四頁一行より四十六頁二行）「正寛法師と名乗れり」まで（熊王、正儀の恩に感じ、義理と恩愛との二道かけて進退此に谷まり、遂に出家したる次第を明にす。一篇の精彩此に在り。忠臣孝子が義烈の一念、烈々として焼えんとし、「今夜こそ正儀を討ためと心に思ひ定め」つ、「討つべきは今なりと心を取直せども」、「幾度か思ひ直して討たんとすれども」、前には「領地を興へん」といひ、今又もどごりをあげて名乗の一字（正）を給はり、恩賜の具足を興へられ、少しも己を疑はぬ正儀の様を見ては、嗚呼「情

## 熊 王 丸

に向くる刃なし」。義は洵に泰山より重けれど、恩亦北海より深きに非ずや。義を守らんか、恩を如何すべき。恩に就かんか、義を如何せん。此に到りては只「死」あるのみ。乃ち「刀を取直して腹かき切らんと」すれば、「取つておさへて動かせ」ざるを亦如何ともするなし。遂に「もどごりを切放ち」て佛門に歸す、義士の至情、孝子の苦衷、誰か之を讀んで泣かざるものあらん。◎何の戦功もなければは省略法。◎熊王恩に感じて涙せきあへず……………如何でか討たるべき……………刀のつかに手をかくべきやうもなし……………大聲をあげて泣號びぬは熊王の心情舉措を漸層的に寫したり。第五段（四十六頁二行―終）は熊

王發心後の事を記し、事件の終結を明にす。

語法

◎心許なし。熱語の形容詞。◎六郎の形見とも思ふものを。は感動詞。語句の中間又は末尾につく。或は召に應ずる時に返答として發することあり。◎今は自ら死ぬるより外はなし。死ぬるよりを死ぬよりと誤るなかれ。よりは動詞の連體形につく關係詞なればなり。

第十一課 アラビヤ馬

解釋

◎馬主。馬の所有主。◎脚のさざみ(あ)馬脚の歩幅。◎雲を霞と遙か遠方に行方を隠して……◎夜のとばり。帳なり、帷幕、等も當る。垂れ下げて區切りをするに、ここは夜といふ(暗黒なる)帳を垂れて見えなくなれるなり。◎半死半生(はんじやうはんじやう)疲勞の様子を示せるなり。體はていと訓む。◎閣下。軍隊にては將官を呼ぶ詞、勅任官を呼ぶにも敬ひてかくいふ。◎風土。氣候地味。◎丹誠。精を出す、勉強、努力する。

◎家長 一家の主人。

備考

◎動物に對する愛好心を養ふと共に、馬の國家生産上及國防上缺くべからざることを認識せしむべし。本材は獨逸讀本よりとる。

文章の修飾體制

第一段(四十六頁六行—四十九頁八行)アラビヤ馬の優秀なる事を述べ、それを證すべき一例話を挙げたり、◎もう一文も引けぬ。半死半生の體は少しも、弱りはててなごいはずして、具體的の語を用ひ讀者の感を深からしむる相換法。◎ひらりと擬態法。◎後をふりかへりくは反覆法にして、◎雲を霞とは比喻法な

り。◎「閣下、三千金が惜しう御座いますか。此の馬が欲しう御座いますか。」一語直に人の腸を抉り、對者をして啞然たらしむる警句法◎追手のトルコ人は……空しく歸つて「騎者騎馬黃金、三つとも失つてしまひました。」と報告する外はないといひて、面目なげにも報告したる事を記さざる、前の馬主が再び馬をひいて來て、「閣下……」といつたとのみ叙して此の馬を買取りたるをいはざる、總て之を讀者の想像に任せ、脈々たる餘情、永に盡くる事なからしむ。何等省筆の妙ぞ。第二段(四十九頁九行—終)アラビヤに優れたる馬を産する所以を説明し、或人の旅行日記を引用してその證左とせり。

## 語法

◎それ馬主が逃げた。それは口語の感動詞。たは完了の助動詞。  
 ◎後れいば。後れいば口語下一段活用の動詞なり。文語にては  
 下二段に活く。凡て文語の下二段活用は口語にて下一段活用と  
 なる。◎いくら金を拂つても。いくらには口語の副詞。文語の何  
 程にあたる。◎馬はさもうれしそうに。さもは副詞にて感動の  
 意を有す。

## 第十二課 笑

## 解釋

◎「笑ふ門には福來る」これ諺を引用せるなり◎和合。仲よくす  
 るなり。親は子を愛し、子は親を敬ひ、夫は妻を愛し、妻は夫  
 を重んじ、兄弟姉妹互に孝悌を以て交はるなり、◎家業。農工  
 商、其他我家の生業にて種々あり、◎家運。一家の運の向くこ  
 とにて、繁榮すると、◎家道。一家の生計にて暮し向き即ち家  
 計なり、◎意氣。元氣といふに同じ活動力なり、◎公明正大。  
 私利邪念なき心の清き狀◎省みて。我が心の善惡正邪を自ら考

笑

へみる、<sup>◎</sup>やまし 疚しとは心の安からぬこと<sup>◎</sup>上天に恥ぢず  
 省みて疚しからざれば、天の明を以て我心を照すも、心に恥  
 づることなしの意。孟子盡心上篇に「仰不<sub>レ</sub>愧<sub>ニ</sub>於天<sub>一</sub>俯不<sub>レ</sub>慙<sub>ニ</sub>於  
 人<sub>一</sub>」とあり。これと同義にして、何れも能く身を修めたる上に  
 就ていふ、<sup>◎</sup>同情 思ひやりの心、<sup>◎</sup>儀式公會、儀式とは婚禮、  
 葬送の如きをいひ、公會とは懇親會、談話會の如き、何れも  
 多數人の集團する會合を指す、<sup>◎</sup>短所 落ちご、ぬけめ、  
 弱點をいふ、<sup>◎</sup>品位 人品、品格<sup>◎</sup>聲譽 聲はよき評判、譽は  
 名譽、<sup>◎</sup>歡心(いん) 人の御機嫌、<sup>◎</sup>花客 得意、ひいきにし  
 て買物をして呉れる人、顧客ともいふ、廣き意味にては、取引

笑

する先方、<sup>◎</sup>中心 心の底 <sup>◎</sup>愛敬(あいぎ) 人すきのする言語  
 態度、<sup>◎</sup>聲色 こわいろのこと

備考

◎笑に就て、時と場所とを詳説すべし。

文章の修飾體制

第一段(五十一頁六行)は諺を引用して一篇の主旨を明にす。第  
 二段(五十一頁七行—五十二頁二行)には善き笑を叙し、真によ  
 く笑ふの工夫を説きたり。そは(一)一家の和合、(二)身體の健  
 全、(三)心事の公明正大に在り、第一分節(五十一頁七行—五  
 十二頁二行)、第二分節(五十二頁三行—同七行)、第三分節(五十

笑

二頁八行―五十三頁二行)に於て順次之を詳説す。第三段(五十三頁三行―終)、一轉して善からざる笑を挙げ、第一分節(五十三頁三行―同七行)、先づ笑ふべからざる場合に就きて叙説し、次で第二分節(五十三頁八行―終)不徳の笑を列記せり。

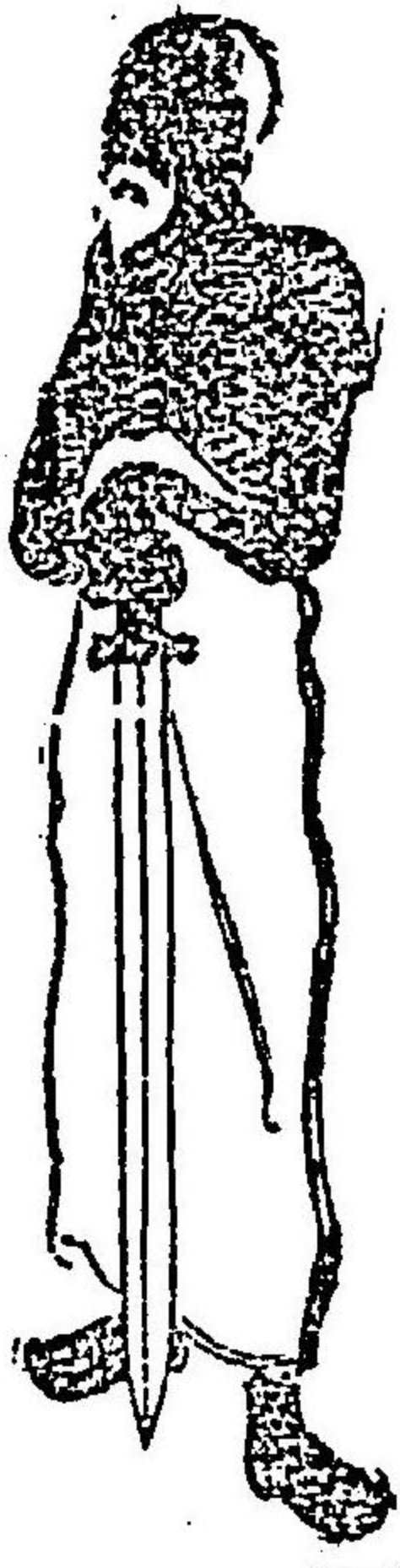
◎一篇の字眼は笑にして隨所に之を點出す。◎第二段故に笑ふべし、一家擧つて笑ふべしは反覆法なり。

語法

◎笑 動詞より轉來したる名詞。動詞の連用形は名詞に轉用せらる、而して動詞より轉來したる名詞には送り假名を附せざるを法とす、◎笑ハント欲セバ一家ノ和合ヲ計ルベシ 欲セは動

笑

詞の將然形。ハは假定の條件を示す關係詞。ベシは命令の助動詞。假定の條件に對して命令形を用ふること當然のことなり。もし欲すればとせば之が結びは確定の語ならざるべからず。◎イハンヤ 副詞的修飾語。まして。その上になどの意に用ひらる。◎ムシロ 副詞、彼れよりも此れと擇ぶ性質を有す。





少年鼓手

第十三課 少年鼓手

解釋

◎原文は「ロングマン」讀本卷四にあり、「チヨイス、リーダー」  
 卷四にも轉載されあり。時は十九世紀の初め、ナポレオンが  
 露都への進軍の途次とあり。(備考参照) ◎少年鼓手 樂手にて鼓  
 を打つ少年、音樂隊の少年とみてよし。◎すさまじい 物凄い、  
 ぞつとする、◎雪なだれ 頽雪、すべつて落ちくる雪、◎進軍の  
 調 鼓の打ちかたが進軍の曲なりとの意。進軍の調は、勇氣を  
 振作する壯快なる調子に出來居れり。◎突貫將軍 鉦劍を以

少年鼓手

て敵に突入することを得手とする將軍、◎上衣 外套なり。◎  
 異口同音(いくどう) 多數の人が同意見なるより、言ふことが同  
 音に一致する。◎軍中の花 ビエールを指す。軍中にありて、  
 花のやうに萬人の注意を集めるよりいふ。◎萬緑叢中紅一點の意  
 なり。

備考

一篇の眼目は愛情と勇氣にあり。國家の爲めに全軍の勇氣を鼓  
 舞して進軍を容易ならしめんとする少年の勇氣。部下を子の如  
 く愛する將軍の温情。國家の目的はかくありて達し得らるゝな  
 り。◎今参考のために、原文の意を以て補はんに、(一)この進

## 少年鼓手

軍の時人々は食物と睡眠との不足より頗る疲勞してありたり。それを勵まさんとして、少年鼓手は花見遊山はなみゆうざんに行くやうなる元氣にて鼓を打ちたり。鼓の音は山に響き谷に應へて甚元氣よかりき。さればマクドナル將軍は『汝の妙手によつてモスコイまでも進軍し得べし』と、この少年を稱賛したり、(二)後年マクドナル將軍は、佛國南部の田舎の花園に晩年を送られたるが、老將軍の散歩の時、或壯者わかものは其腕に於て將軍の逍遙を助けつゝありたり。其壯者はこの少年鼓手なりき。

## 文章の修飾體制

有名なる奈翁アルプ越の際に起りし一美譚。一將軍、身命を擲

## 少年鼓手

つて少年鼓手を救助せし武士道の精彩を寫すに、艶麗花の如く銳利刃の如き筆致を以てす。事と文と相俟ちて情景兼備はり、感興盡くるなきを觀る。吹く風は身を切るやうに寒かつたは比喩法。我が子の死ぬのを見て父が命を惜しむ理由はない。軍中の花も亦然り。百雷の一時に落ちかかる様なひびきと共に、山のやうな雪なだれがなだれて來は比喩法にして誇張法を兼ねたり。ピエールよ、少年鼓手よは反覆法。ピエールよ、ピエールよ、も亦然り。息も絶え絶えは疊語法。手早く帶をほごいて、ピエールの體にくくりつけて合圖をすと……は接叙法なり。もし、帶をほごいた。くくりつけた。合圖をした。

## 少 年 鼓 手

なご之を切れくにする時は、帯をとき、くもりつけ、合圖をし、引上げた各動作が引續きて刹那の猶豫もなく行はれたる事を現はしがたし。谷底に墜落したるピエールをば、人々聲を限りによびたれども何等の答なかりしが、やがてかすかに鼓聲起り、人々しきりに氣をいらちたる光景、さてはマクドナル將軍が兵士の止むるをも聞かず、谷底に入らんと主張せし様を寫したるあたり、斷叙法を用ひ、單文を重ねて一に措辭の勁強をはかりたると對照して深く玩味するを要す。◎全軍一同に歡喜の聲をあげた、アルプの山もふるふばかりには倒裝法なり。ふるふばかりにと結びたるところ、無限の情趣湧けるを見

すや。

第一節(五十四頁七行—同九行)事件の起りし場合を明にす、後段の前提なり。第二節(五十四頁十行—五十五頁六行)には鼓手の墜落せる事をいひ、第三節(五十五頁七行—五十六頁三行)には少時何の音沙汰もなかりし谷底より暫くにして鼓聲起り人々しきりに氣をいらちたる旨を述ぶ。第四節(五十六頁四行—同八行)鼓聲漸く低く一軍の焦心益々加はり、第五節(五十六頁九行—五十七頁五行)隊司令官、身命を棄てて少年を救はんとし、人々の止むるをも聞かばこそ。第六節(五十七頁六行—五十八頁三行)遂に千尋の谷に下る。天何ぞこの仁慈の好將軍に

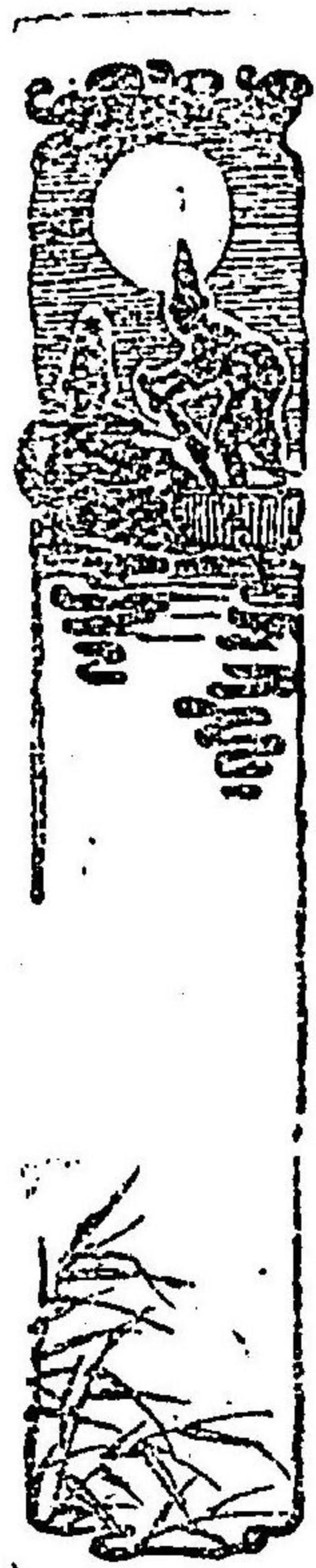
## 少 年 鼓 手

幸せざらん。第七節（五十八頁四行—同九行）めでたく少年を救ひ上げて、第八節（五十八頁十行—終）一軍歡喜の喊聲湧きぬ。

語法

①寒かつた寒くありのくあが約まりてかとなり。りが音便にてつに變じ。それに、過去の助動詞たのつきたるものなり。②雪なだれがなだれて雪なだれは熟語の名詞。なだれは動詞。③むざんやむざんは名詞。やは感動詞。④ビエールよ。少年鼓手よは感動詞。⑤何の工夫もつかぬぬは打消の助動詞。文語にてはすを終止形にも又中止形にも用ふれども口語にてはすは中止

形となり、ぬは終止形となる。⑥下りようとするようは口語未來の助動詞。口語にては未來時をあらはすに四段活用動詞にはうをつけ、其他の動詞にはようを附く。



出兵征士

第十四課 出征兵士

解釋

①出征兵士 戰地へ向つて出發する兵士。②義勇の務 これは國家に對する國民の義務なり。③孝子の譽 此れ父母に對する子としての義務なり。孝經に曰く「身體髮膚受之父母不<sub>ニ</sub>敢毀傷<sub>セ</sub>孝之始也、立<sub>テ</sub>身行<sub>ヒ</sub>道揚<sub>メ</sub>名於後世<sub>ニ</sub>以顯<sub>ス</sub>父母<sub>ヲ</sub>孝之終也」と忠孝は一の至誠に出づるを知るべし。④いとへ いははれ、自愛せよ。⑤勇氣は彼に……………出征兵士の勇と、一家族の情をいふ。

出兵征士

備考

①前課の『少年鼓手』の勇敢と連絡をとるべし。また前々課の一家和合の範をこゝに求め得べし。父母弟妹心を一にして國家の大事に献身せんとす。壯絶美絶。②この課に於て、日本特有の忠孝の念と、武士道の精神とを鼓吹すべきなり、これ本課の如き國民的教科に於て欠くべからざる事。

③身はたとへ、武藏の野邊に、くちぬとも、留め置かまし、大和魂、  
吉田松陰

④我今爲<sub>レ</sub>國死、死不<sub>レ</sub>背<sub>ニ</sub>君親<sub>ニ</sub>悠々天地事、感賞<sub>ス</sub>明神<sub>ニ</sub>、

同上

## 出 征 兵 士

◎西の海、東の空と、かはれども、心はおなじ、君が世の爲め

(兄)、信 海

◎大君の、爲には何か、惜しからん、陸塵の瀬戸に、身は沈む  
とも、  
(弟)、月 照

◎議論より、實を行へ、なまけ武士、國の大事を、よそに見る  
馬鹿、  
南 八 郎

## 文章の修飾體制

六七、七七、七七、七七の新たなる格調を具ふる韻文。第一節は父が激勵の辭にして、第二節は母が慈愛の誠なり。第三節、弟の勇ましき意氣は尙且懦夫をも起たしむべく、第四節、妹の健

## 出 征 兵 士

氣なる心底は聊も後顧の憂なからしむ。忠肝、鐵の如き出征軍人たるもの、何ぞ奮激せざるを得んや。第五節、「命さゝげて御國の敵を討ちなん」と辭訣する、固より當に然るべきのみ。第六節は以上を總括し、一に公に奉ずるを知りて他なき此の一家別留の狀を讚嘆したり。

◎行けや行けや、とく行けは反覆法。うれしうれし……  
さらばさらば……皆然り。◎老いたる父の望は一つは語を省略したるもの。母の願は一つ。さらばさらば……  
出で行く兵士。……一家。勇氣は彼に情は是に。を、しの別。皆之に同じ。◎出征兵士の弟ぞ我はは語句を倒置したるも

出兵征士

の……妹我は。御國の敵を討ちなん我は。何れも之に同じ。

語法

◎やよ待て やよは呼掛の感動詞。文の首部に位す。

◎兄君 君は敬意を有する接尾語。

◎御國の爲に行きませいざや ませは敬語の助動詞。いざやは

いざごやの二つの感動詞の合したるものにて誘ひ出す意を有す。

◎さらばさらば父母さらば さらばは感動詞。人と別るる時な

ごに發する語なり。

◎御國の敵を討ちなん なんは未來完了の助動詞。則ち完了の

出兵征士

助動詞ぬの將然形に未來の助動詞んの添ひたるものにて動詞の連用形につづく。なんは又動詞の將然形につきて感動の意を有することあり。又指定の關係詞として用ひらるゝことあり。關係詞のなんは其下を用言の連體形にて結ぶを法とす。以上三種のなんは全く其性質を異にすと知るべし。



招待状

解釋

◎満六十歳 ほんげがへり、むそちのよはひなごいふ。甲子の歳より數ふれば六十一(即ち満六十歳)にして再び甲子に還る、故に還暦(れきん)といふ。齡を祝ふなり。◎光榮 ありがたき仕合せにて、名譽と思ふ事、◎十回忌 十年目の忌なり、忌は齋にて禮を盡して死者を祀るなり。◎法會(ほふ) 佛のまつり。◎かねて 豫ねてにて、前以てなり。◎記念碑 記念の記を古は記と書きたれども、今は紀の字を書くものあり。記を本となす。

文章の修飾體制

諸種の場合に於ける招待状の模範を示し、その様式を了得せしむるを目的とす。招待状に缺くべからざる事項三あり。(一)日時、(二)場所、(三)事由即ちこれ也。其の一、其の二、共にこれを具へたれど、獨りその三には場所を示さず。こは豫て建碑の賛同を求めし時、己に之を議りたればなり。扱其の三には別に「追て書き」を添へたり。「追て書き」とは本文の缺を補ひて書き添ふる文言を云ひ、「追て」「二仲」「書き添へ申候」など書き起すを常とす。嚴肅なる式場等を準備するに當りては、詳に人

招待状



招 待 状

員を知る事必要なるにより、この一項を加へたるなり。因にいふ、我邦の風として時間の懸値をいふ事多し。例へば六時に行はんとする事は五時と通知し、發信人は始より「五時と知らせ置きて六時に始めん」と云ひ、受信人も亦「五時の通知なれば六時頃に始むるならん」といふ。彼此交、相欺き、恬として恥づるを知らず。誠むべき事ならずや。(第十七課、時間参照)。

等しく來臨を希望する辭ながら、或は御光來下され候はゞ光榮の至に存候といひ、或は御參列なし下され候はゞ有り難く存じ奉り候といひ、若くは又御光臨の榮を賜はり度といふ。措辭の多趣多様なる、深く玩味するを要す。

招 待 状

語法

◎老父事 事は名詞。他語の下につきて熟語の名詞を形成す。又獨立して名詞たること言を俟たず。

◎滿六十歲 滿は接頭語。其數に滿てることに用ふ

◎相達 相は副詞。書簡文にては殆んど無意味に動詞の上に加ふ。相開きの相の如き亦然り ◎御心安き方々 方々は疊語の名詞。人々の意にて尊敬の意を有す。方々は又副詞として用ひらるゝことあり

◎有り難く 熟語形容詞の副詞形。 ◎此段 熟語の名詞 段はかでの意。 ◎追て 副詞。つけ加へて。なほくの意。又遠

解釋

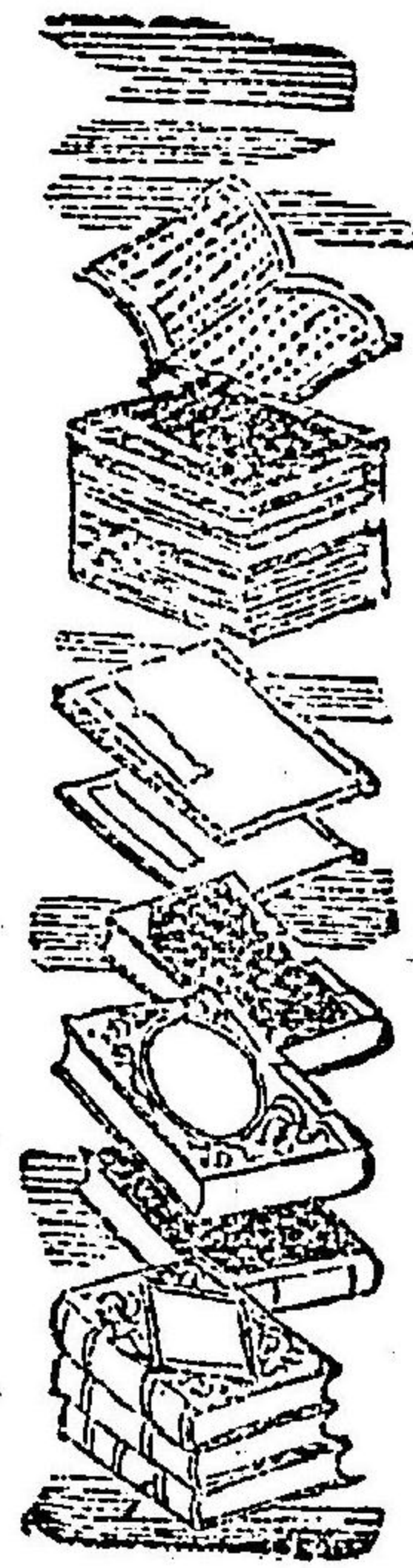
第十六課 料理

◎鹽梅 味の加減なり。辛、甘、鹹、酸、苦、を五味といふ。

この五味のよき調和を鹽梅よしといふ。えんばいと訓むことあり。書經に『若作和羹、爾惟鹽梅』とありて味を調ふることなり。轉して工合のよきを鹽梅よしといふ。◎經濟 これは、經濟學などの經濟といふ程深き意味あるにあらず。費用といふまでの意なり。◎スタリ 無駄といふ意。◎獻立 膳部に載すべき副食物の次第にて、朝は何々、晝は何々、夕は何々を目を定

第十六課

からず。やがて等の意味にも用ふ。



## 料

めたるもの。それは一週間分位豫め作り置くこと必要なり。

朝、味噌汁、鶏卵、煎豆、香の物、

月曜晝、牛肉、葱、キントン、

夕、焼肴、汁、

火曜……………

水曜……………

## 備考

◎これ家庭的衛生的材料なり、特に女生徒に深く心得さすべき材料なり。◎寒時は動物性の脂肪に富めるものを、暑時は植物性の野菜類を用ふべきは一般に就ていふなり。されど人々の體

## 理

## 料

## 理

質によりて相違あるべきは勿論なり。たとへば、肥滿せる人は肉類よりは野菜物を主とし、瘠せたる人は之に反して肉類を主とすべきなり。斯くいふも、同一物を幾回も重ねるはよろしからず。人體には脂肪、蛋白質、澱粉等の諸質を程よく有せざれば健康を保持すべからず。明治卅七八年戦役に、旅順に包圍せられたる露兵が恐るべき腐血症に罹りたるは、肉類にのみよりて新鮮なる野菜に缺乏したる結果なりきといふ。故に材料は多種多様の變化あらしむるをよしとす、この點よりみれば西洋の料理法は概して衛生法に適ひ居るが如し、よろしく研究すべし。

◎本課の料理法と、前課の招待とを連絡せしむべし、

## 文章の修飾體制

第一節（六十四頁三行—同七行）、總括して料理の材料及び方法に注意すべき事を述べたり。之を第一段とす。以下細目に涉りて序説し、之を第二段とす。即ち第二節（六十四頁八行—六十五頁三行）には材料の選定並に調理法は衛生、經濟、味の三方面より考ふべき事を、第三節（六十五頁四行—同十行）には材料選定の季節によりて注意すべき事を述べ、第四節（六十六頁一行—同八行）には食物の變化の大切なる事を、第五節（六十六頁九行—終）には臺所を清潔にすべき事を叙したり。各節皆劈頭に大綱を掲げて次に之を細説し條理整然として意義明瞭。

料

理

結末警句法を用ひ（座敷ヤ庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ以下）大に世人を覺醒せしむ。千鈞の力ありといふべし。

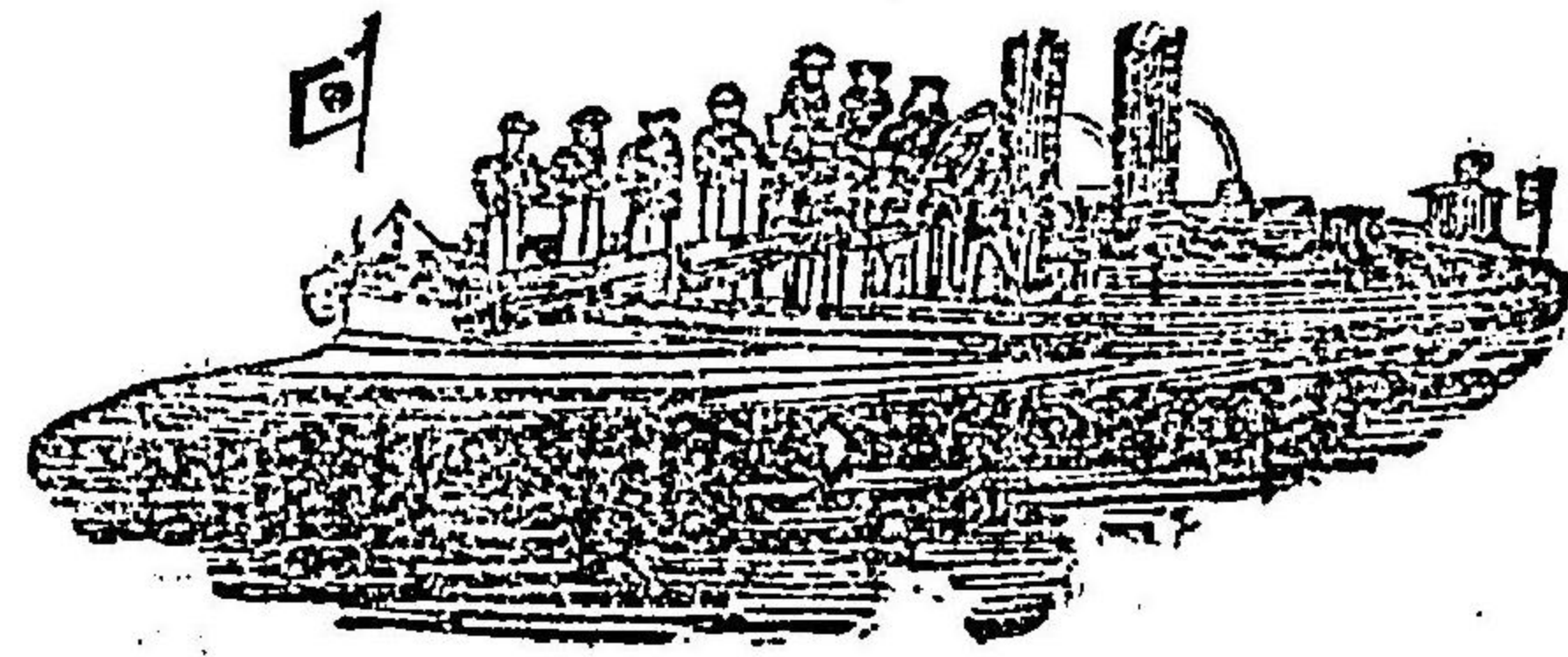
## 語法

◎全ク別物ノ如ク味ハハレ 全クは轉來の副詞。レは可能の助動詞ルの中止形。◎考ヘナケレハナラヌ ナケレは口語打消助動詞ナイの假定形。ナラは動詞の將然形。考ヘを考ヒ、考イなどゝ誤るなかれ。◎コナレノ良イモノヲ選ブベク………スタリノナイ様ニ用フベク ベクは命令の意に用ふる助動詞ベシの中止形。◎多少ノ注意ヲ要スル 要スルは文語にては連體形なれども口語にては終止形にも連體形にも用ふ。人々ノ好ミニモ

料

理

適スルの適スルも亦同じ



第十七課 時間

解釋

◎人生七十年 人生五十年にして、七十年は古來稀なりと言ひ傳へらるゝよりかくいふ。こゝにては最も多きをとりて計算せるなり。◎身を立て……孝經に『身體髮膚受ニ之父母一不ニ敢毀傷ニ孝之始也。立ニ身行ニ道揚ニ名於ニ後世一以顯ニ父母一孝之終也。』とあるより出づ。◎無爲(む) 何事もなすことなきをいふ。論語に『無爲而治者其舜也與』とあり、◎年齒 齒はよはひ。齒なり、年齒は年齢なり。◎片言隻句 片言はかたこと、隻句は

第十七課

一句なり。◎未練(みれ) あきらめられぬこと。◎時は金なり  
西洋の格言なり。(Time is money)

## 備考

◎末段集會云々の點 第十五課と連絡せしめて時間の觀念を明瞭ならしむべし。◎朱熹の詩に『少年易老學難成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲』とあり、六八頁六行目の一寸の光陰はこれより出づ。

## 文章の修飾體制

第一節(六十七頁六行—六十八頁二行) 人生と時間との關係を叙し、隱約の裡、勉めて時間を利用すべき事を知らしめ、以て

## 時

## 間

後段の序説とせり。之を第一段とす。第二節(六十八頁三行—同七行) 寸陰も之を重んずべきをいひ、第三節(六十八頁八行—六十九頁五行) よく勉め、又よく遊ぶべきを説き、第四節(六十九頁六行—七十頁二行) 無益の事に心を勞して時間を空費する事なく、一意業務に對して全力を注ぐべきを述ぶ。以上は自己一身の上に就きて時間利用の道を叙説せるもの。之を第二段とす。第五節(七十頁三行—終) は第三段なり。轉じて他人に對する方面を叙し、他人をして時間を空費せしめざる様注意すべき旨を説きたり。

此の文、第十七課の劈頭に大綱を掲げて次に之を詳説せると異

時

なり、各節の終に至りてその意義を括約し、反覆之を叙説せり。爲に文義の明瞭を加へたると共に筆致をして自ら莊重謹嚴ならしめ、讀者をして覺えず肅然襟を正しうせしむるの概あり。

語法

◎將又。將も又も共に接續詞。◎學問の種ならぬはなく。ぬは打消助動詞すの連體形。ぬの下にもものなどの體言を入れて考ふれば其意を明らかにすることを得。動詞の連體形の下に體言を省略すること甚だ多し。

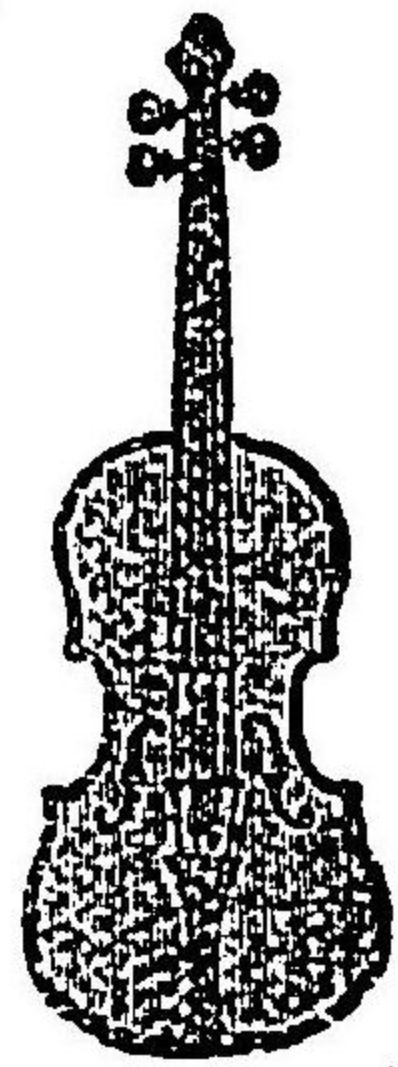
◎よく勉め又よく遊ぶ。よくは形容詞の副詞形。即ち轉來の副詞なり。◎深く之を悔いて。悔いは也行上二段活用動詞なるを

間

時

間

以て之を波行上二段活用動詞と混同するなかれ。◎くよくくと副詞的修飾語。



心 苦 の 工 畫

第十八課 畫工の苦心

解釋

①一國寺 堺市南旅籠町東四町にあり、今は大安寺と稱す。  
 ②寄食、ゐさふらふ。人の許に厄介になりて養はれ居ること。  
 ③住持(ぢう) 寺の主僧。④心得ぬ事 了解されぬことにて、こゝは、如何なる心持にて居るか判らぬこと。⑤一家 一人前の門戸を張り得る人。⑥出でて遊び給へ。こゝは、出稼ぎ又は修業したまへの意。⑦心構 心中に立案すること、彼是と考をめぐらすなり。⑧さゝやく 低聲にて語る。私語。⑨心なし、本

心 苦 の 工 畫

意なし。⑩丹青の妙 丹はあか、青はあをにて色彩のことなれども、轉じて繪畫の事となる。⑪其意を得……其妙趣を感得して、自家藥籠中のものとなすこと。

備考

⑫この材料は柳澤淇園の雲萍雜誌に見えたるものよりなれり。  
 ⑬ある人予がもとに來りて繪に魂をいると申すことは、いかやうなることをして畫き侍れば、魂は入り候ことぞと問ふ。予こたへて云、すべて繪にはかぎらず、何ごとにも實心をこめてだに致さば、たましひの入らずといふ物あるべからず。他のことはいざしらず、繪に魂の入りたりと思ふは、諸國にて種々



## 心 苦 の 工 書

名畫も多かる中に、我見し泉州左海に一國寺と云ふ精舎あり。  
この寺は千の利休もしばらく居られし時、物好きを盡して、庭  
園座敷五間ほごもあり。一間には檜の樹一本をゑがけり、一間  
には臥したる鶏二十五羽ばかりをゑがきてあり。いづれも彩色  
ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみこの繪をか  
きたる畫師、この寺に寓居すること三年ばかりの中に、何一つ  
書きたることなく、碁をこのみて、只それのみ日毎の樂みとし  
て、あるはこゝかしこ遊びあるくに、はやく三とせを経たり。  
一たびだに筆をとりしこともなきは、いかにも心得ざるものか  
などおもひて、あるとき住持の申されけるは、その許、畫をも

## 心 苦 の 工 書

て一家をなせりといひながら、筆を取りたることもなく、圍碁  
にのみ年月を過ぐるゝはいかに、我衣食の費をいどふにはあ  
らねど、何處へなりともあそび給へ。愚老も所用ありて京への  
ぼり、ことによりては一年も在京せんもはかりがたしといふに  
彼畫師きゝて、それこそいと名残をしきことに候へ。さらば年  
來の恩謝に何か少しの畫をのこしまゐらすべしとて、心がまへ  
のみにて、又四五日ほごふるに、住持は何をゑがくと見たくて  
待てごも、絶えて筆をとらず。ある夜小坊主の、住持が居間に  
夜ふけてきたり、ひそかに申すやう、かしこに行き給ひて、そ  
と覗きて畫師のありさまを見給へとささやきけるに、やがて小

## 心 苦 の 工 書

坊主にいざなはれて、書師が居間をうかゞふに、明り障子の腰板に身をよせて、さまざまの姿をかへつゝ、寢起するありさまを見るより、小坊主を引きよせ、こよかし、のぞくべからず、はやく臥せよとて、その身も寢間に入りたり。あくれば書師まだきに起き出で、一間なる障子にゑがくを見れば、みな臥たる鶴なり。書勢不凡にして、丹青の妙いふべからず。さあるに又の夜はいかにどうかゞふに、前のごとく夜もすがら寢ずして、あけなばかくや書かん、とやせんかくやあらましなど、獨りつぶやきつゝして臥しぬれば、住持も知らぬ顔にて過しゝが、十日あまりにして、その鶴およそ廿四五羽をゑがけり。またも夜

## 心 苦 の 工 書

ふけて覗き見るに、こたびは肘をはり足をのべ、手を口にあてつゝ鶴のふしたるさまを見て、臥しけるに、夜あけてかの書師がもとに往持來りて、けふえがき給へる鶴の姿は、かやうにやそめぬらんと、よべ覗き見たる姿のさまして見せければ、打ちおごろき、禪師にはわがゑがゝんとおもひかまへし心を、はやくも悟り給ふはいかに。知り給へるにかと問ふに、いやとよ、昨夜そのもとのやうすを、そとうかゞひて知りたりと云へば、書師それよりして、二枚はゑがゝすして、杉戸の畫に、檜木一樹をゑがきて立ちぬるとぞ、この檜木をゑがきし後、東國へ下向の折から、東海道箱根の山中にて、檜の木の子の心になひたる

がありければ、東國へは下らずして、ふたゝび泉州一國寺へ立ち越えしかば、住持見て大におどろき、東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られしはいかなることにかと云ふに、さきに畫がきし檜の木の枝、ひと枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たればわざぐ立ちもどりたりとて、一枝をかきをへいとまごひして出でさりぬとぞ。畫にたましひを入るゝといへるはかゝるたぐひとおもひぬといへば、ある人も感じて歸りぬ。(雲萍雜誌)

◎大家妙手とやらん程には、眞劍勝負にてかゝらねばならぬとの意を寓したるなり。

### 文章の修飾體制

第一節(七十二頁六行―同八行)一國寺なる杉戸の繪につきて略叙す。これ第一段にして後段の序説なり。第二説(七十一頁九行―七十三頁二行)一畫工の一國寺に寄寓せるもの、出立に臨みて畫かんとし、その準備をなせし事を、第三節(七十三頁三行―七十四頁六行)鶴の名畫略成りしも僅を餘して中止し、別に杉を畫きて立去りし事を記し、第四節(七十四頁七行―終)畫工途中より引返して曩日の繪に補足したる旨を述ぶ。良工苦心の蹟、達人丹精の功、洵に偉大なる教訓を吾人に與ふるなり。以上を第二段とす。此の段叙述の法、畫工を主人公としながら之を第

## 心 苦 の 工 畫

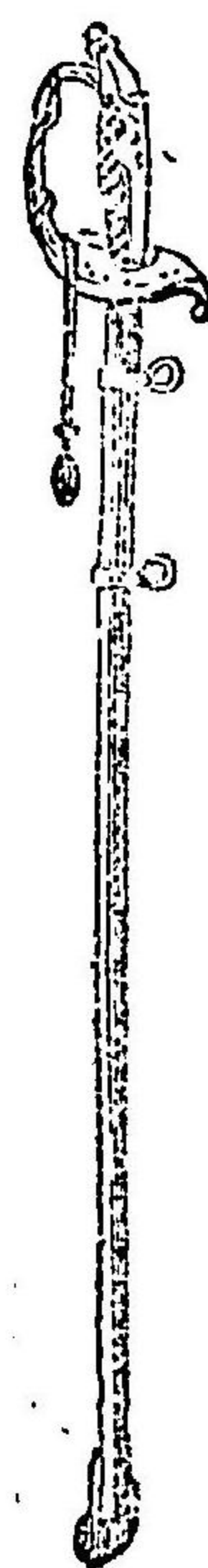
一者に置かず、主に寺僧を中心としつゝ、巧に畫工の興措動作をあらはす妙なるかな。

## 語法

◎そはいと名残をしき事なり。そは事物の指示代名詞。それに等し稍古き詞なり。◎何か書きて参らすべし。参らすは敬語の動詞。べしは未來の助動詞。参らすにはたてまつる、進上す等の意あり。又他の動詞に接続して殆んど意味なき敬語として用ひらるることあり。思ひまゐらす、願ひまゐらす等の如し。◎かしこに行きて。かしこは場所を指示する代名詞。あしこ、あそこ等と同じく遠稱に用ふ。◎夜もすがら。すがらは接尾語。盡

## 心 苦 の 工 畫

る(すが)の轉化にして盡るまでの意なり。路すがらのすがらは直從(から)の約にしてながら、それなりに等の意を有す。◎出で去れりとなん。なんは強く事物を指定するとき用ふる關係詞。用言の連體形にて結ぶを法とす、されど時として結びを略することあり此處も其一例なり。



# 第十九課 瀑布

## 解釋

◎瀑布 水の高きより落下する状の恰も布を曝らすが如きよりいふ◎詩歌に入りは(備考)◎日光山 (研究資料卷九)◎瀧口 水の瀉ぎ下らんとする口◎那智 紀伊國東牟婁郡那智村にあり。山中に熊野夫須神社あり、那智權現即之なり。『那智の山雲居に見ゆる岩根より千ひろにかゝる瀧の白糸』(夫木集)◎布引瀧 生田川の上流、海岸を距ると十五町、今は神戸市に屬す。神戸市水道源地をこゝに設けられてより俗化せるも、未だ其風趣を失

瀑

布

瀑

布

はず(備考)◎養老瀧 美濃國養老郡養老村大字白石の山中にあり、大垣の西南三里餘(備考)◎ナイヤガラ 北米カナダにあり、エリー湖の水ナイヤガラの瀑布となりてオンタリオ湖に落下す。左右の二つ、右をカナダ瀑と稱し幅約八町、左をアメリカ瀑と稱し幅約三町、高さ共に百六十尺、左右の中間にゴード島あり。世界第一の瀑布と稱して観光の人絶えず。◎しぶき 繁吹くこと飛散する細沫。◎名狀 状態を言ひ表はすこと

## 備考

◎詩歌を左に掲ぐ。

◎日照ニ香爐ニ生ニ紫烟ニ  
遙看瀑布掛ニ長川ニ

第十九課

瀑

飛流直下三千尺

疑是銀河落九天 (唐) 李白

快瀉蒼崖一道泉

白龍飛下蔚藍天

空山有此真奇觀

倚杖來看思凜然 (宋) 朱熹

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて

在原行平

世の憂き時のなみだにぞかる。

ぬきみだる人こそあるらし白玉の

在原業平

まなくもちるか袖のせばきに。

おちたぎつ瀧のみなかみとしつもあり

壬生忠峯

老にけらしな黒きすぢなし。

風ふけどころもさらぬ白雲は

瀑

世をへておつる水にぞありける。

凡河内躬恒

地勢愈急劇となり、遂に九十度前後に到るや、流水は即ち瀑

布となり、怒憤直下すること百尺、花崗岩屏を穿ちて來り、爲

めて萬斛の雪を運びて天より擲ち下すが如く、白光閃々、忽ち

にして瀧壺に下るや、花崗岩亦た此所より突出して水を承け、

水、岩に激して逆上し、飛沫百道、玉瑩珠跳するの壯觀に到り

ては、花崗岩に依らずんば遂に看るべからず、

みづの色たゞしら雪と見ゆるかな

誰れさらしけんぬのびきの瀧 顯房

(志賀矧川、日本風景論)

## 瀑

◎昔男、津の國むはらの郡あしやの里に知るよしして行きて住みけり。其家の前の海のほとりにあそびありきて、いさごの山にありといふ布引の瀧見に登らんと云ひてのぼりて見るに、其瀧物よりことなり、其高さ二十丈ひろさ五丈ばかりなる石のおもてに、白絹に岩をつゝめらんやうになん有ける。(伊勢物語) ◎あしの屋のいさごの山のみなかみを登りて見れば布引の瀧(夫木集) ◎昔元正天皇の御時、美濃國にまづしくいやしきをのこありけり。老たる父をもちたりけるを、此男山の本草をとりて、其あたひをえて父を養ひけり。此父、朝夕にあながちに酒を愛でほしがりければ、なりひさご(瓢)といふものをこしに

## 布

## 瀑

つけて、酒をうる家に望て、つねに是をこひて父を養ふ。あるとき山に入て薪をとらんとするに、苔ふかき石にすべりて、うつふしにまろび(轉)たりけるに、酒の香のしければ思はずにあやしくて、其の邊ほとりを見るに、石の中より水流れ出づるところあり。その色酒に似たりければくみてなむるに、目出たき酒なり。うれしく覺えて、其後日々これを汲みて、あくまで父を養ふ。時にみかご此事を聞召して、靈龜三年九月日其所へ行幸ありて敬覽ありけり。是則至孝の故に、天福地祇あはれば、其徳をあらはすと感せさせ給て、美濃守になされにけり。家豊かになりて、いよく孝心の心深かりけり。其酒の出る所を卷養の瀧と

## 布

名づけられけり、云々、(古今著聞集抄)

### 文章の修飾體制

第一段(七十五頁六行—同七行)瀑布に就きて概説す。◎詩歌に入り書圖に上るは對句。第二段(七十五頁八行—七十七頁七行)我邦の著名なる瀑布を列舉し、日光山、那智山の瀧、布引瀧、養老瀧に關し順次其勝槩を叙説せり。◎水晶のすだれをかく。霧と散り雨と飛び。白布をさらせるが如しは皆譬喩法にして、瀧はいよく小、境は益々静かは對句なり。第三段(七十七頁八行—七十八頁九行)はナイヤガラ瀑布につきて説明し、擬人法(二瀑相並んで雄を争ひ)、譬喩法(一面銀山玉臺となり。水晶

瀑

布

の花を咲かす)、誇張法(其のひびき萬雷のごとろくが如く)を用ひてその壯觀を活寫せり。

### 語法

◎霧と散り雨と飛びて。とはと化りて又はの如くなごの意を有する關係詞。◎美觀を以て。以ては接續詞。そのために。それによりてなごの意なり。◎大地も爲にふるひ。爲には副詞的修飾語。其故に、因て、なごの意なり。ふるひはふるの延語にして波行四段活用動詞の中。止形なり故に之をふるへと誤るべからず。◎水晶の花を咲かす。すは使役の助動詞。◎名狀すべからず。べからは可能の助動

瀑

布



瀑

布

詞。べからは又推量の助動詞として用ひらるることあり



第二十課 鵜飼

解釋

①月なき時 月あれば水面一體に明るくなる故に篝火を焚く効力

なきに至る。故に暗夜をよしとす。②鵜匠 織田信長が長良川

に遊びたる時、鵜飼を鵜匠と改稱し、以て鷹匠に對せしめ、祿

を給し魚船を賜ふ。③風折烏帽子 立烏帽子の頂を折り伏せた

るものにて左折、右折の別あり、略式烏帽子なり。④こしみ

腰に纏ふ簀なり。⑤古代の風 鐵籠に柱あり、それに木を立て

かけて焚く。⑥右往左往(さうわう) 右に行き左に行き交ふなり。⑦

鵜

飼

鶺鴒

さばき。取扱ひて正す。③火のこ。火紛、火片。④ひたすら。一向、いちづに。⑤岐阜提灯。美濃國岐阜の名産にて、骨細く紙薄く長卵形をなす。紙面には、彩色して花鳥草木の美しくしき繪畫を施す、夏の夜軒頭につる。⑥金華山。岐阜山、一に稻葉山ともいふ。岐阜の東にあり、長良川其北を流る。

### 文章の修飾體制

第一節(七十九頁一行—同七行)鶺鴒の歴史と長良川の鶺鴒とに就きて略叙す。これ第一段なり。第二節(七十九頁八行—八十頁四行)先づ鶺鴒の季節を述べ、次に鶺鴒の始まれる頃の光景を寫したり。⑦ほうくと呼ぶは寫聲法。第三、四節(八十頁五

鶺鴒

鶺鴒

行—八十二頁六行)鶺鴒酣なる頃の様を描き、鶺鴒匠の手並の鮮かさと、鶺鴒の活動の勇ましさとを述べ、併せて篝火の用を説明せり。⑧右往左往は相換法なり。第五節(八十二頁七行—終)獲物の多寡につきて記し、鶺鴒の將に終らんとする頃ほひの状況をあらはす。⑨此方に浮び彼方に沈み、彼處にかくれ此處にあらはれは對句。以上は第二段にして長良川の鶺鴒の様を詳説せり。舷に並べる鶺鴒、山上にあらはれたる月、袂を拂ふ川風。何等配合の妙ぞ。一結錦上に花を點じ、讀者をして恍惚この一幅極彩色の畫中に彷徨する事久しうせしむ焉。

鶺鴒

寫法

鶻

◎古來 副詞的修飾語。古へよりこのかた、昔より今まで等の意なりされば古來よりなどといふは非なり。◎ほうくくと呼ぶ聲。ほうくとは副詞的修飾語。

侷

◎ひたすら 副詞 直向(ひた)の義、一向に、一途に、などの意。◎必ず頭よりす すは佐行變格動詞。之を使役の助動詞と混同すべからず。◎此方に浮ひ彼方に沈み 此方、彼方は何れも方向を指示する代名詞。◎彼處にかくれ此處にあらはれ 彼處、此處は何れも場所を指示する代名詞。

第二十一課 紡績

紡

解釋

◎綿花紡績 他に絹絲紡績、麻絲紡績などあれば特にいふ。また一般需要の多きにもよる。◎作業(うさげ) 工作の事業即仕事なり。◎俵より出し 先づ綿花を (一)開俵機に附す、綿花は島より採取して實と綿とを分離し、これに壓力を加へて俵としたるものなれば、俵より出して其固塊を解かざるべからず、◎梳綿機 開俵機の次に (二)開綿機によりて不純物を除去す、不純物を除去したる後 (三)打綿機に移して殘存の雜物を去り、かくて

績

紡

(四)梳綿機に移す。こゝにて種子、草葉等の碎片を除き、兼ねて製絲を丈夫ならしめんがために纖維を並行せしめて連續膜綿を作る。④レース 絹紐といふ意。⑤練篠機 (五)練篠機にては纖維の平行と重量の平均とを完全ならしむ。⑥精紡機 練篠機を通りたる後は (六)粗紡機を経て (七)精紡機にかゝる。⑧蜘蛛のい 蜘蛛の巢。

備考

⑩工業の進歩を知らしむると共に、第三課分業と關連せしむべし。

文章の修飾體制

紡

績

二段段に分つべし。第一大段(八十三頁六行—同九行)は我邦紡績事業の概況を述べ、第二大段(八十三頁十行—終)は紡績作業につきて詳説したり。此段、又分れて三段となる。第一段(八十三頁十行—八十四頁二行)は紡績作業の概観を叙したり。起首、「紡績工場ニ入りテ見ヨ」と呼びかけて讀者の注意を喚起し置き、次いで徐に之が説明を試む。八十四頁三行より八十六頁八行までは第二段にして第一段を細説せるもの。先づ綿花を筵綿とし、更に之を精選し、次に篠形に集め、遂に之を絲とするまでの手順を示せり。此間諸所に譬喩法を用ひ、以て其狀況を明瞭ならしめ、且文趣を饒からしむ。第三段(八十六頁九行

紡

〔終〕昔の絲車と今の機械とを對照せしめ、感嘆の辭を以て一篇の結末とし、遙に第一段「其ノ作業ノ……何人モ驚クナルベシ」に呼應せしめたり。

語法

◎皆機械ニヨリテナサル 皆ハ副詞。ナサルを限定せり。◎吹雪ノ風ニクルフガ如ク クルフは動詞の連體形。ガは體言又は體言的の語を承くる關係詞なり故にクルウとつゞくるは不可なり。クルウのウはヒの音便にして動詞の連用形なればなり。◎サテ 接續詞 然有リテの約 元來副詞なるも轉じて接續詞となれるなり。◎加フルニ 熟語の接續詞。◎驚クベキモノニア

績

紡

ラズヤ ヤは反語之を感動詞のヤと混すべからず。



績

## 第二十二課 蟲の農工業

## 備考

語句の特に解釋を要すべきものなし。たゞ蚯蚓に就て一説を引用せん。

蚯蚓は最も下等にして、意氣地なき者として人に卑しめらるゝものなれども、チャールズ、ダーヴキン氏によりて初めて其勳功を世に紹介せらるゝ榮を得たり。蓋し蚯蚓は、常に地中にありて土を食し、肛門を地面に舉げて之より續々其の食したる土を送り出すものにして、其の土の腸中を通過する際、

其の中に混ぜし僅少の滋養分のみを吸収して生活するものなり。故に蚯蚓の食は美味ならざる代りに此の世のあらん限り實に無盡藏なり。斯の如き生活なるを以て蚯蚓は下層の土を上層へ送り出す効あるものにして、換言すれば、絶えず一種の耕耘に従事して土地を肥沃ならしめつゝあるものと云ふべきなり。此の事實は、此の博識なる博物學者の眼を埃て初めて認知されしものにして、氏の計算によれば、此の多數なる小動物の地面へ送り出す土は、地球各處に於て其の耕地を六十年間に一尺づゝ耕耘するものなり、(生物界之現象動物篇による)

業工農の蟲

文章の修飾體制

前半（八十七頁七行―八十八頁八行）は蠶、葉卷蟲、蜜蜂、蜘蛛、蚯蚓等の營作につきて、後半（八十八頁九行―終）は蟻の動作につきて記し、之等の昆虫の所爲が人類の營める農工業に似たる所以を説明せり。全篇皆譬喩。而もその言廻し方盡く相異なり、「……は……に等し。」「……は……に同じ。」「……は……といはんか。」「……は……とも見るべし。」「……といひ、或は「……に似たらずや。」「……ともいふべし。」「……といひ、若くは又「……是即ち……なり。」「……是即ち……に異ならず。」「といふ。雲蒸龍變、端倪すべからずとはかゝる筆法

業工農の蟲

をこそいふべきなれ。

語法

- ◎たぐみに 副詞的修飾語。
- ◎醸造の業と建築の業とをかねたりといはんか かは疑問關係詞。
- ◎やゝ太き やゝは副詞。太きは形容詞の連體形。
- ◎かくて 熟語の接續詞。かくありての約。
- ◎うち返す 熟語動詞。
- ◎農夫の田畑を耕すに似たらずや たらは指定の助動詞。たりの將然形。
- ◎やは疑問の關係詞。
- ◎熟練なる 形容詞的修飾語。

## 物の價

## 第二十三課 物の價

## 解釋

⊙需要(じゆ) もとめ。いりよう。⊙供給(きやう) 需要に對して提供(ていきやう) すること。

## 備考

⊙價格とは財と財との交換比例にして、換言すれば價值と價值との割合をいふ。一種の財が實際他の財と交換せらるゝに依りて初めて成立するものなり。故に甲の價格はそれと交換せらるゝ乙の分量にして、乙の價格は甲の分量なり。價格は單獨に存

## 物の價

在するものならで、他に比例し關係して成立つものなり。價格の騰貴といふは、交換上他の財を得る比例の増加したることにして、價格の下落とは、交換上他の財を得る比例の減少したることなり。

左に金井博士の説を抄録すべし。

價格が生産費に該當する額よりも上に昇騰する時は、一方に於ては消費者を驚かして需要を減少す。之に反して一方に於ては直接生産者と商人とを奨励して供給を増加す。即ち格外に多き利益を占めむと欲して供給者の地位に立つもの益多く、其の間相互の競争も甚だし。故に價格は遂に低落するの傾向あり。



## 物の價

此の場合に價格其のものが需要供給の關係を支配すること、猶ほ需要と供給とが價格を決定するが如きは誠に明白なり、世人皆價格の需要供給の關係に支配されるを知れりと雖も、未だ必ずしも價格却て需要供給の關係を支配することあり兩者の間に因となり果となるの相互的反應あるを知らず。是れ實に一を知りて二を知らざるものなり。(社會經濟學六三〇)

## 文章の修飾體制

全篇を別ちて四段とすべし。第一段(九十頁六行より九十一頁七行)「能はさればなり」までは物の價を生ずる條件(一、効用あること。二、隨意に得られざること。)第二段(九十一頁七行)次

## 物の價

に「より九十二頁十行まで)は物の價の高下を定むる條件(需要供給の關係)につきて説明し、第三段(九十三頁一行—九十四頁七行)は物價の標準となるもの(普通の價)につきて叙説し、第四段(九十四頁八行—終)には特別の場合を明にせり。各段等しく舉例法を用ひて具體的に説明したるものなれど、その體制に至りては夫々相同じからず、第一、二段は先づ大綱を擧げて全段を總括し、次に順次之を細説す。第四段は之に反し、先づ分説して最後に之を括的し、第三段にありては始めと終りとに於て二度之を概括せり。

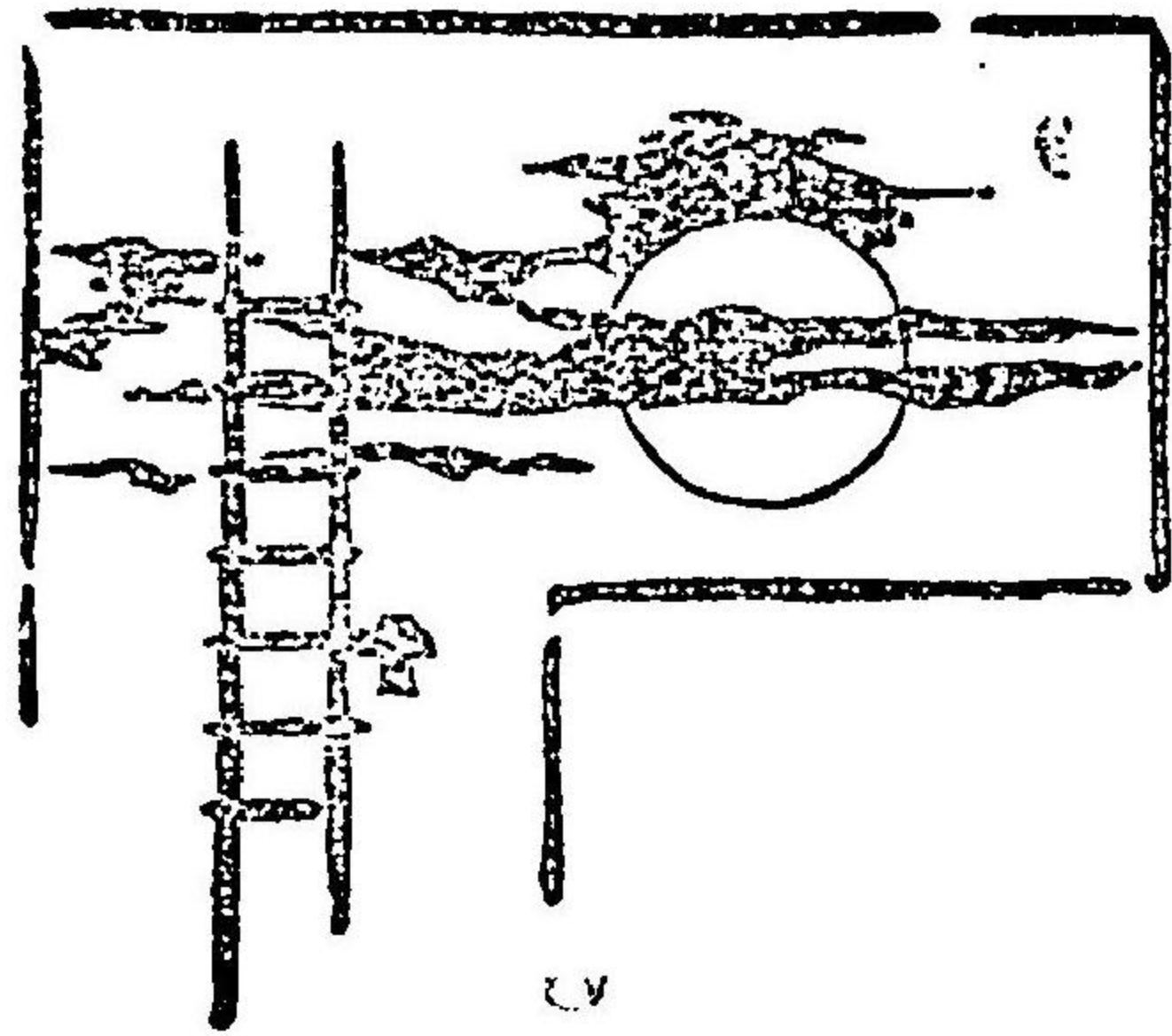
## 語法

物の價

◎隨意に得らるゝものなりとも。なりは助動詞の終止形。どもは未定の條件を表す關係詞にして助動詞及動詞の終止形につく。ご及びごもは動詞助動詞の已然形につきて確定の條件を表す。人の生命を保つに必要なれどもものごもの如し。◎之を買ふ必要なく。買ふを買うと混同すると勿れ、即ち前者は連體形にして後者は連用形買ひの音便なればなり。◎次に物の價云々。次にハ熟語の接續詞◎かくて其の家の價は段々高くなりて。かくてハ熟語の接續詞。段々は疊語の副詞。◎各其の家の賣れざらんことを恐れて。各は副詞。ざらは打消の助動詞◎買手にはかに増すときは。にはかには副詞的修飾語。靴屋の利益非常に多か

物の價

るべしの非常にも亦同じ。



## 第二十四課 樺太より臺灣へ

## 解釋

◎新版圖 新たに領分りやうぶんとなりたる土地。こゝにては明治卅七八年戦役の結果、我日本の領土となりたる樺太を指す。◎眞岡 マツカと訓む、西海岸漁業の中心なり。後方に段丘を負ひ本島唯一の不凍港を控へたり。今は眞岡支廳、區裁判所、學校、郵便、電信支局等あり、戸數約一千。◎不凍港 寒冬と雖も氷結することなき港、◎鈴谷川 源を留多加嶽の南東方に發し千歳灣に注ぐ。長三十里、流域に鈴谷平原あり。移地適地の地積三

萬町に達し、内二萬町歩は農耕に、一萬町歩は牧場に適す。◎内淵川 長三十里、流域は内淵平野をなし、農耕適地一萬二千四百町、牧場適地二萬町、外に五千八百町歩の泥炭地あり。◎留多加川 長三十里、海岸附近の平野を留多加原野といふ。凡三千四百町歩は農耕に、一萬三千三百町歩は牧場に適す。◎大泊 元のコルサコフとポロアントマリとを合したるもの、我舊政の頃より治所あり、露領に及ぶも改めず。四十一年八月樺太本廳の豊原に移轉すると共に、市況稍振はざるが如きも、南部樺太第一の市街なり。四十一年末調査によれば戸數一千四百五十、人口五千五百。この地水陸の交通最も利便にして、中央

幹線の道路はこゝを基點とす。豊原との間に輕便鐵道あり、二十六哩を三時間にして達すべし。◎豊原 もとウラジミロフカと稱す。今は樺太廳のあるところなり。守備隊司令部、豊原支廳學校、醫院、裁判所、郵便局、兵營等あり、市街の附近には幾多の移民地相連り交通の便甚よし、人口三千七百戸數約一千、日に日に繁衍す。◎網樺 又手網さてあみのこと、手にてすくひとる網◎天然林。人工によりて造林したるにあらず、自から實生みはえして林となりたるもの。◎根松 松柏科の自生喬木にして黃褐色の樹皮に灰色の斑點あり、材は建築用となすべし。◎五十度 北緯を指す

## 備考

◎第九課と呼應せしむべし。國民の進取的膨脹的氣風を養成するを主旨とす。

## 文章の修飾體制

前文（九十五頁四行より同六行「御なつかしく存候」まで）は一別以來の情を述べ、本文には樺太の狀況を記し、己の懷抱を披瀝せり。かくて本文は二大段に分つべし。樺太の狀況を記したるは第一大段（九十五頁六行「其の後日々」より百頁八行まで）にして自己の懷抱を叙したるは第二大段（百頁九行「終」なり。第一大段は亦分れて二段となる。第一段「其の後日日」

へ 灣 臺 り よ 太 樺

より「大略御報申上候」まで）は序説にして、以下第二段は詳説なり。樺太の氣候より順次地勢交通、漁業、農業林業に及び採礦も亦有望なる事を説きたり。第二段に至りて前段を概括し。我國民が奮進してその開拓に勉めざるべからざるを云ひ、窮北極寒の地、亦骨を埋むるに適するの概を示す。正にこれ人間到處有青山底の意氣、膨脹的新日本男子の眞骨頭、洵に斯の如くならざる可からざるなり。

語法

◎先般御手紙にて、先般は副詞的修飾語。◎日々業務に追はれは受身の助動詞。◎大略 副詞的修飾詞。◎これあり候へば

へ 灣 臺 り よ 太 樺

候へを候得と書くは不可なり則ち候ふの語尾はえにあらずしてへなればなり。◎撞網にてすくひ すくひをすくいとすべからず。すくふは波行四段活用動詞なればなり。



解釋

◎後漢 東漢ともいふ。後漢は前漢に對し東漢は西漢に對してかく名づく。◎漢朝の末流 漢の景帝の末流(中山靖王勝の後)なり。◎魚の水云々『備曰善與亮情好日密曰孤之有孔明猶魚之有水也。』◎首相 宰相の首にて總理大臣なり。◎天下を三分 蜀に劉備あり、吳に孫權あり、魏に曹操あり、天下を三分して各其一を保つ。◎我が子若し 『嗣子可輔輔之如其不可君可自取。』◎臣敢へて 『臣敢不下竭股肱之力效忠貞之節』

繼之以死。◎汝は孔明と。『汝與丞相從事事之如父。』◎表 表は出師表なり、表は文の一體なり。後人云々は安子順といふ人の評に。『諸葛孔明の出師表を讀みて涙を墮さざるものは其人必不忠なり、李令伯の陳情表を讀みて涙を墮さざるものは其人必不孝なり、韓文公の十二郎を祭る文を讀みて涙を墮さざるものは其人必不友なり』云々。◎出はすると讀む出納の出にたすなり。しゆつと讀むときは出入の出にてでるなり、たすどでの相違即ち自動、他動の別に注意すべし。◎天授 天のさづけにて、人の學び得るところにあらずとの意。◎軍令 孔明が部下の將馬謖は魏の將張郃と街亭に戦ひたる時、軍令にそ

むきて敗軍せり。故に舊功を惜しみながら之を斬りたり。これ軍規を重んじ公私の別を明にしたるなり。

## 備考

◎忠君の至誠と公私の別を明にし軍律を重んじたる點とに注意すべし、道德訓話の材料。

## 文章の修飾體制

現字法を用ひ、重々しき漢語を連ね、筆端森嚴にして沈痛の響あり。支那ノ昔……四方ニ起レリ。は先づ時勢を明にせり。之を第一段とす。「劉備ハ……シキリニ賢士ヲモトム」は劉備の家系、人となり、企圖を説く。之を第二段とす。「此ノ時」より百

三頁四行「其ノ一ヲ保タシム」までは第三段なり。劉備孔明を得て臣とし深く之に信任せしかば、孔明も亦よく之に事へ、遂に天下三分の業を成したる旨を記せり。「備崩ズルニ臨ミテ」より百三頁十行までは第四段なり。備の崩ずる際、詳に後事を孔明に托したる顛末を述ぶ。第五段（百四頁一行―同八行）には孔明が幼主を輔けて百方盡瘁せる事を、第六段（百四頁九行―百五頁十行）には孔明が人となり、第七段（百六頁一行―終）には孔明の卒去、敵將の感歎尊崇せる次第を述べたり。天下麻ノ如ク亂レ。我ノ孔明アルハアダカモ魚ノ水アルガ如シ。は何れも譬喩法。智謀百出は誇張法にして、死セル諸葛、生ケ

ル仲達ハ對照法なり。

語法

◎シキリニ 副詞的修飾語。繁く、タビく等の意。◎備サト  
 シテ曰ク 曰クは副詞。言フの延語。◎願ハクハ 副詞的修飾  
 語。ネガフハの延語。◎我が子若シタスクベクンバ ベクンバ  
 はベクバと同意。鼻聲ンが加はりて其音を強くせるまでなり。  
 ◎何ゾ破レン 何ゾは副詞的修飾語。疑問の意を有す。疑問の  
 副詞又は詞副的修飾語の加はるときは反語となる。◎自ラ責ラ  
 引イテ 引イテは引キテの音便。之を引ヒテと誤るべからず。

第二十六課 韓國の風俗

解釋

◎オンドル これは韓音にて溫突の義。突は煙出しのこと。◎  
 ことわざ 諺なり。言葉にて古來の言ひ慣はしなり。諺は習慣  
 或は經驗の欠しきより起る。◎冠禮 加冠の禮にて、古日本に  
 行はれたる元服の如きもの。◎チヨンガ 總角のこと、總角  
 は童兒のなすものなり。三十歳にして未だ一人前にもなれぬ故  
 かくいふ。◎斬髮 髪を束ね結はずして散髮にすること、日本  
 の男の如きをいふ。◎南に面し 南面するは位の尊きを意味す。



## 韓 國 の 風 俗

天子は南面し、臣下は北面すとあり。こゝにては死者に禮を厚くしたるなり。④四尺 竹管の節をぬき羅字となして作る。  
 ⑤うちかけ 打掛なり。おびしたる上に被むるかいざりなり、  
 婦女に限りて被る。古は廣く日本にも行はれたり。⑥きぬた  
 衣板の意にて砧とかく。衣をのせて擣つなり。臺は木又は石なり。

## 文章の修飾體制

第一段(百六頁十行—百八頁二行)、先づ家屋につきて記述し、その外觀より始めて。内部の構造、それに伴ふ生活の情況に及び、諺を引用し、讀者をして的確にその様を了解せしむ。第二

## 韓 國 の 風 俗

段(百八頁三行—百九頁二行)は服裝につきて、第三段(百九頁三行—同八行)は冠禮につきて叙し、第四段(百九頁九行—百十頁三行)には墓所のしつらへ方を、第五段(百十頁四行—同五行)には喫煙の事を記せり。第七段(百十頁六行—終)に至り、更に婦人の風習を叙説し、結尾夏冬の景物を描きて遙に起首の見すばらしき家屋の様と相對照せしむ。白妙の衣干したる眺め、遠近相應する打砧の響き、余韻綿々として絶ゆる事なきを覺ゆ。

## 語法

⑦冬は又案外に寒い。案外には副詞的修飾語。⑧冬でも夜具を

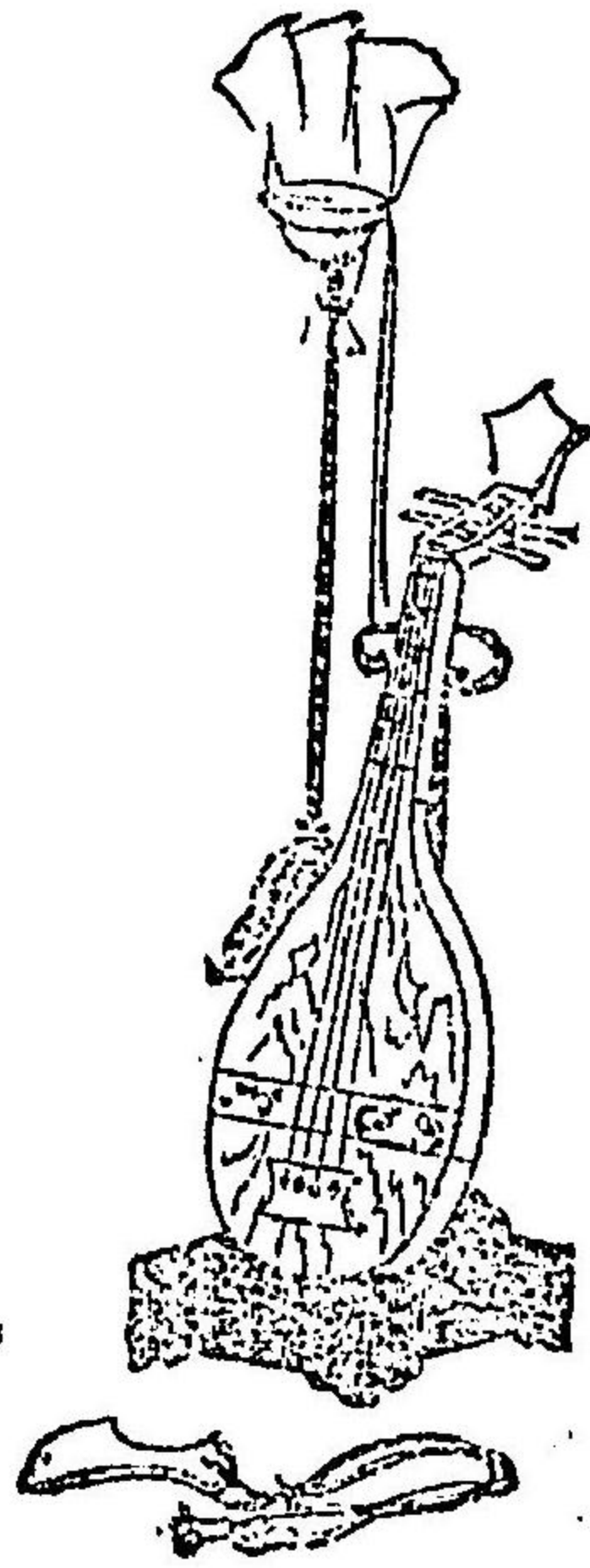
俗風の國韓

用ひない。でもは口語の關係詞。多くの事物の中より或事物をあげて他を推量せしむる場合に用ふ。でもは又後れでもする。死にでもするとの如く動詞、助動詞の連用形につきてするといふ動詞の上につく。

男はゆるやかな。ゆるやかは形容動詞。なはにあるの約なり、形容動詞には連體形なきを以て體言につづくるときはなを添ふ。小高い所で。小は接頭語。日當りのよい。日當りは熟語動詞の名詞形。圓く盛上げたの盛上げも文法上同性質なり。たま〜 疊語の副詞。しば〜の反對。外から見られぬ云々。られは受身の助動詞。この山影にも。ここは場所

俗風の國韓

を指示する代名詞の不定稱。村々相應じて聞える。聞えは也。行下二段活用の動詞なるを以て聞へなど、書くは不可なり。



第二十七課 平和なる村

解釋

◎勸業(くわん) 農工業をすゝめ勵ますと。◎麥稈眞田 麥稈はむぎわらなり。麥藁にて編みたる眞田にて、帽子の材料なり。◎花筵 花ござなり。藁の莖を種々に染めて織りたる筵なり。◎手を空しう…… ぼんやり遊ぶ。◎原案 初め提出されたる議事案。この原案を改めたるを修正案といふ。◎豫算 一年分(會計年度)の収入と支出とを前以て計算するもの、而して豫算の議定通りに収入支出を加減するが本體なり。◎耕地整理

田畑耕地の收穫利用を増加せしめんがため、共同して畦畔溝渠の分合變更をなし、以て諸般の設備を完全にすると。◎灌溉 土地を濕すために水をそぐ。◎二毛作 ふたけ又はにもうと讀む。畠として麥を蒔き、麥を刈取りて更に其跡に稻を植うる如く、一年に二度づゝ收穫するをいふ。

備考

◎町村自治に關する資料なり、模範的農村に關する知識を與ふべし。◎耕地整理法は明治三十二年公布、同三十六年、三十八年に於て改正せられたり。◎本課にて、共同一致の精神より、勤儉力行の美風を會得せしむべし。人皆かくならんか、小は二





## 萬千五に、こ胸同

こは五穀豊稔の國といふにて、我日本國の美稱。①かんがみ鑑みなり。照らしみるにて、手本にすると②天職天より授けられたる職務にて、當然爲さねばならぬと、③のり宣り。告り、いづれも言ひ聞かせらるるなり④戦後經營戦後には整理すべき事業甚多し。又國運發展のために、新事業の計畫著手せらるべきもの多し。それらを片付けて國運發揚の諸般施設を爲すと。⑤大みことのり……勅語及詔書の御旨意を奉體して……勤勉努力すると。詔書は明治四十一年十月十三日下し賜はる。世に戊申詔書といふはこれなり。

## 備考

## 萬千五に、こ胞同

地理。國體。國民性。産業。國運。國民の天職。等を説くところ、特殊的國民教科なり。要は大帝國民の氣象を養ふにあり。

## 文章の修飾體制

第一齣は我邦の地勢を明にし、第二齣は國體を、第三齣は民俗を歌へり。上に萬世一系の君主坐す、これ我國體の世界に二なき處にして、武勇に優れ禮讓に正し、これ我民俗の他に比を見ざる處なり。第四齣は産業に就きて述ぶ。農は素より國の本たり。而も我同胞は更に商工業を進めんとして努力撓まざる也。第五齣は我國民が進取の氣象に富みたる事を、第六齣は我國民が重大なる任務を負へる事を云ひ、第七齣聖教の渥きを奉戴し

萬千五に、こ胞同

國民の一に之に従つて行動する旨を述べたり。各齣皆結末に同一の句を反覆して風韻を饒くし、又隨所漢語を用ひ語句を省略して以て文勢を勁強にす。格調頗る向上的發展的國民を歌ふに合へり。◎名詞を以て結とせる文の多き、深く注意するを要す。◎開けぬ地なし野も山もは倒裝法にして、勤勉努力たゆみなきと日進月歩ゆるみなきとは對句なり。

語法

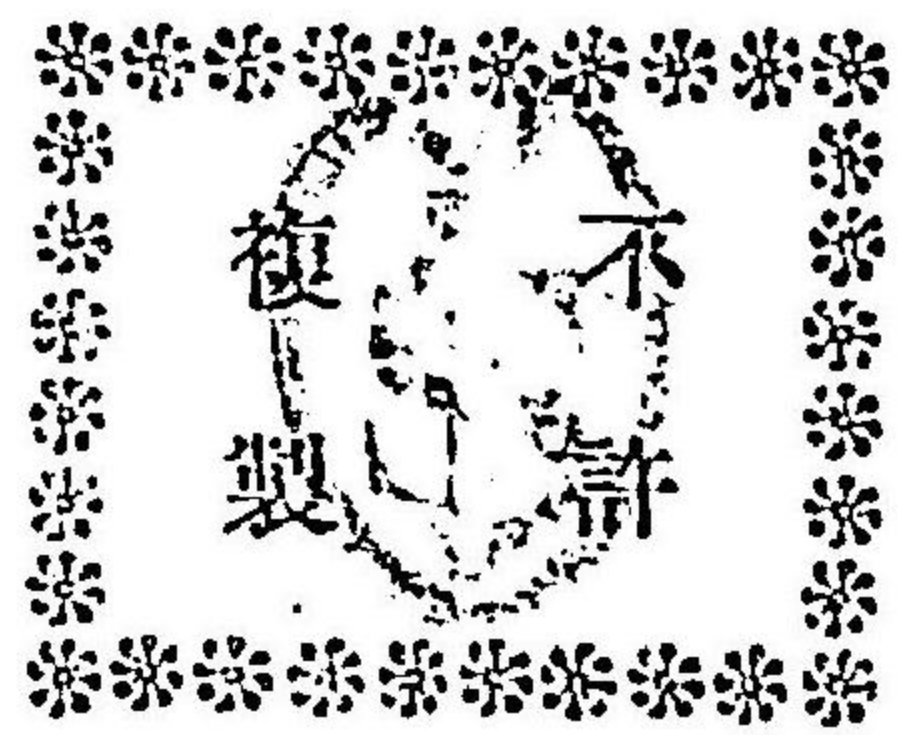
◎神代はるけき昔より 神代はるけきは昔にかゝる形容節。はるけきは形容詞の連體形。◎萬世一系動きなき 下文の皇室にかゝる形容節

萬千五に、こ胞同

◎あまねき光 光は動詞より轉來したる名詞。◎つぎく 疊語の副詞。◎建國以來 以來は熟語の名詞。それよりこのかたの意。◎教育勅詞より給ひ のり(宣)は良行四段活用動詞。◎かくこそと かくは副詞。こそは多くある中より特にそのものを選びとりていふ場合に用ふ、而して其結びは用言の已然形なり。さればこゝもかくこそあれなどの語を入れて考ふべし。◎戊申の詔書かしこしや やは感動詞。



明治四十三年五月十二日印刷  
明治四十三年五月十五日發行



編者  
村田直輝  
市原隆作  
鈴木正美

發行者  
東京市赤坂區赤坂壺町十三番地  
笠原幡多雄

印刷者  
東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地  
遠藤廉治

印刷所  
東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地  
木社

發行所

東京市赤坂區赤坂壺町十三番地

有文社

振替口座東京二〇七六六番

定價金二十五錢

郵税金四錢



陸海軍教授其他專門學士執筆

賜天覽

# 軍人普通學

毎月一回發行○每號凡百六十頁○會費一ヶ月分金廿五錢三ヶ月分七十錢半年分金壹圓三拾錢○規則書郵券貳錢○見本一部金貳拾七錢(三錢以下郵券代用不苦)

本講義は國民的精神教育に主力を注ぎ兼て中學程度の普通學の最も適切なるものを講述すされば題するに軍人を以てすと雖も一般國民としての好讀物特に教育に關係ある諸彦好參考たるなり

發行所

東京市赤坂區壺町十三番地

軍人普通學會

振替口座東京二九四四番

## 教育界の最新刊音樂名著紹介

### 古今名曲集

定價 五拾五錢

右は古今高名の小歌曲を蒐めて學校教科及家庭樂の資料を供し左記は和洋の大歌曲を掲げ音樂會の演奏用材に資す

### 和洋名曲集

定價 六拾五錢

### 聲樂階梯(訂正第 十一版)

定價 五拾錢

聲樂階梯が吾國中等學校の音樂教科書として又教員受驗者の良參考書として又音樂補習及獨習者の良師友として絶大の良成績を有せるは斯界高名の事實也今や十一版を發行す又偶然にあらず唱歌の學理と實技とを併せ學習し得る良書は樂界唯本書あるのみ

3  
454

叙事詩曲 **平忠度**

定價 四十五錢  
郵稅 廿五錢

▽ 作歌者 市原自適先生  
▽ 作曲者 新清次郎先生  
△ 作曲者 奧好義先生  
△ 作歌者 下田歌子女史  
評好 嘖々

叙事詩曲 **臥龍岡**

定價 貳拾錢  
郵稅 貳拾錢

**唱歌教授法** 通論

定價 五拾錢  
郵稅 八拾錢

こは吾國教育音樂界の先覺者に  
して中等初等の普通學校は申す  
に及ばず音樂専門の學校より感  
化院に至るまで各種の階級者に  
音樂と教育を試み多大の實驗  
を收めたる山本正夫君の蕙蓄を  
纂輯せし菊版二百頁の新著也

**發行元**

東京神田區三崎町三丁目一番地

**音樂社出版部**

(振替貯金口座東京壹四參〇四番)

